
仮題「シャングリラ」第一章

月読天舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮題「シャングリラ」第一章

【Nコード】

N7299B

【作者名】

月読天舞

【あらすじ】

滅び行く世界人類が人工的に創り出した超能力・・・能力を持つフリーヤ・アルデベータ・・・彼は世界を救えるのか！！

第1話「始まり」(前書き)

少々過激な表現があります。あしからず……

第1話「始まり」

どこだ？ここは？

暗い。暗い。

声が聞こえる。誰かが話してる？

「計画は失敗という事か」

「結論を出すのはまだ早いかと・・・」

「この男も何度失敗すれば気が済むのか・・・」

「記憶を消している以上、失敗はありうる事です。」

「十分な能力は与えてあるはずだ。」

「計画その物に誤りがあるのではないのかね？」

計画？記憶・・・俺の名前は・・・

「これ以上の失敗は許されん。時空の歪を生みかねんからな・・・」

俺の名前は・・・俺の名前は？

「成功を祈るよ」

足音が聞こえる。誰の？いやそれより俺は・・・

男に向かい光が差す。光は男の体を溶かしていく。
消える・・・俺は消えるのか？

「リユーヤ」

誰かが呼ぶ声がする。

「リユーヤ」

リユーヤ？俺の名前・・・俺の名前か？

「起きなさい、リユーヤ」

「誰だ？」

リユーヤはそう言って目を覚ました。

「寝ぼけ眼クサシクサシね」

大きな目にスレンダーな体が印象的な軍服を纏った美女が、開け放

たれたドアの前に立っていた。

「リッター大尉……」

リューヤは軍服姿の女にそう言った。

「個室待遇にはまだ馴れないの？」

リューヤは起き上がり暗い紺のスーツを手に取った。

「そうですね……あの施設じゃいや応無しだったから……。」

「元に戻されたくなかったら、それなりの働きをする事ね。」

「分かってます。こんな時間に……非常召集ですか？」

「いえ、王女様がお呼びよ。今度のアルテイル公国への視察で直々に話しておきたい事があるそうよ。」

「そうですか……」

変な夢を見た……そう何かを見たんだ。いや、聞いた？所詮夢だ……思い出せなくても支障はないさ……

「リッター大尉、その髪型似合ってますよ。」

リューヤはそう言っつて部屋を出た。

リッターと呼ばれた女は髪をかきあげ、廊下を歩いて行くリューヤを見送った。

「セクハラね。後で注意しとかなくちゃ」

第2話「謁見」(前書き)

主人公リユーヤ・アルデベータ、そして女王アレクシーナ・クライ・
……その新たな関係が今、築かれる

第2話「謁見」

リユーヤは自分の警護すべき王女アレクシーナの謁見の間に立った。

アレクシーナは第三王女でありながら、その行動力と見栄えの良さから、クライ王国の外交の一端を担っている。演説がうまく国民からの人気は高い。

流れ込むオイルダラーを貧民層と新規事業の開設にあてるという役割をアレクシーナにやらせて、国民に王族に好意的な目を向けさせようという目的もちろんあるのだろう。

リユーヤは王族に忠誠を誓っていたが、アレクシーナの事を今一歩好きになれていなかった。優し気に見える瞳の奥に湛えられたどこか醒めた感覚が、リユーヤの心を何故か不安にさせるのだ。

「夜勤、ご苦労」

リユーヤは謁見の間前で警護する衛兵にそう言った。

「は！アレクシーナ様がお待ちです。」

リユーヤは衛兵の間を通り抜け、アレクシーナの待つ謁見の間に入ってしまった。この謁見の間はアレクシーナ専用に建てられた謁見の間で、王や第一王子のものに比べれば貧相ではあったが、それでも一流ホテルのそれよりも遥かに豪華だった。

奥の一段高い所にアレクシーナ第三王女の姿が見える。

リユーヤは王女の姿を認めると膝まずいた。

「よく来てくれた、リユーヤ・アルデベータ」

透き通った高い声が謁見の間に響く。

リユーヤは頭を垂れたまま、低く頷く。

「は！お呼びとの事ですので、早速馳せ参じました。」

「そう堅くならなくても良い。貴殿はアルファ・研究所で高い能力

を示した優秀な戦士だと聞き及んでいる。」

「は！有り難いお言葉でございますが、自分などまだ右も左も分からぬ若輩者でございます。」

「今度のアルテイル公国の視察で、そなたにやって貰いたい事があるのだが……」

「は！」

「人に聞かれてはちと拙い。」

アレクシーナは首を振り、人払いをさせる。

「近くに。」

アレクシーナの高い声が響く。

リューヤはゆっくりと立ち上がり、アレクシーナがいる玉座の方へと歩いていき、アレクシーナの5歩程手前で再び膝まずいた。

「もつと近くに……」

リューヤは言葉のままにアレクシーナの玉座のすぐ側まで近づいた。アレクシーナは玉座から立ち上がり、リューヤの側に立ち、耳の側まで口を近づけた。

第3話「忠誠」(前書き)

リユーヤ・アルデベータが、死んだはずの女リン・サンドライトの為に、アレクシーナ・クライ王女に忠誠を誓う。物語はここから始まっていく……

第3話「忠誠」

「お前は王族にではなく、私個人に忠誠を誓えるか？」

アレクシーナ第三王女はリユーヤの耳元でそう言った。何が言いたいのか意味がとれない。下手な事は言わないのが無難な事だろう。「私はクライ家に忠誠を誓いました。そしてアレクシーナ様の護衛を任されています。」

「クライ家ではなく、私に忠誠を誓えと言っている。嫌なのか？」

「そう御命令ならば……。」

アレクシーナはゆっくりとリユーヤの耳元から離れ、ゆっくりとした所作で玉座に座った。

「今の件了承ならば、お前の求めている物をお前に与えよう。」

「は？」

「リーン・サンドライトに会わせてやろうというのだ。」

「リーンに？」

リーン・サンドライトは、リユーヤと同じアルファ研究所で一緒に過ごした幼馴染だった。幼馴染というより、恋人と言える程の関係だった。あの地獄のような研究所で、親に捨てられた二人は、励まし慰め合いお互い生き延びていった。リーン・サンドライトが訓練中の事故で死んだと聞かされるまで……

「生きていますか？」

リユーヤは声を荒げた。

「声が高いな……冷静ではないぞ。リユーヤ。」

「はい……。」

「生きている。お前が望むのならば引き合わせる事も可能だ。ただ……。」

「……。」

「？」

「お前が現実を受け入れられるかどうかは別の話だな。」

「何か不都合でも？」

「都合がよければ「死んだ」などとは言われまい。」

「会えるならば……」

「誓うというのか？」

「ええ。」

「そうか、ならばアルテイル公国への視察の護衛、お前に任せる。」

「は！」

「恐らく、アルファ能力が初めて試される局面になるはずだ。」

「危険なので？」

「予感だな……下がってよい。」

「は！」

リユーヤは深々と頭を下げ、後ろを向き玉座を後に足早に歩いた。

「リユーヤ」

王女の声が聞こえる。

「はい。」

リユーヤが振り返る。

「先程の件忘れるでないぞ。」

「は！」

「私は約束を守る女だ。」

「……」

「下がってよい。」

リユーヤは足早に謁見の間を去った。

リーンが生きている……逢えるのだ……

リユーヤはリーン・サンドライトとの思い出を思い起こしながら、
自室へと向かった。

第4話「思い出」(前書き)

生きていた少年時代の恋人。リユウヤはリン・サンドライトに会えるのか？

第4話「思い出」

「リッター大尉！」

リューヤの自室の前で、リッターが壁にもたれ掛かり待っていた。

「早かったわね。」

「ええ。」

リューヤはリン・サンドライトの事を考えている事を悟られないように、視線を下げてそう言った。

「何の話だったの？」

「アルテイル公国への視察の護衛に選ばれました。」

「ほんと！」

「？」

「私と同じ任務なのね。」

「大尉も？」

「そうよ、へまは許されなくてよ。」

「そうですね。」

リューヤはどこか虚ろにそう言った。リンの事が気になっていた。不都合な事態とはなんなのだろう……

「上の空ね。アルテイル公国とは友好的な関係とは言っても、気を抜きすぎるのは良くないわ。」

「アレクシーナ王女は危険な予感がするって……」

リッターは少し首を傾げた。

「あの人の予感によく当たるわ……」

「何もないといいんですがね。」

「そうね。それに越した事はないわ。明日には私にも報告書が届くと思うわ。あなたの初仕事うまくいくといいわね。」

「ええ。」

「今日はもう休みなさい。」

「はい。」

「おやすみ。」

リッターはそう言ってリユーヤに背を向けた。

「おやすみ。リッター大尉。」

リユーヤがそう言うのとリッターは軽く手を挙げ応え、足早に去っていった。

部屋に入り、リユーヤは暗めの紺のスーツを脱ぎベットについた。囲まれた空間の中だったとはいえ、幾つもの思い出があった。訓練の後に差し出されたタオル。一緒に買い物をしたショッピングモール。教官に隠れて交わされた秘密のキス。小さな思い出一つ一つに涙が零れそうだった。

リーンは生きている・・・生きていてくれて嬉しい。どんな不都合な事があったて、生きていてくれた方がいい・・・。どんな境遇だろうと俺が必ず助け出す。きつと・・・

感情が眠りを妨げる。眠れない。

リユーヤは布団を頭から被り無理に眠ろうとした。

第5話「白い光 前編」(前書き)

リユーヤの能力が今試される

第5話「白い光 前編」

アルテイル公国へ飛び立つ日が来、リッターとリユーヤはアレクシーナ第三王女を警護し、専用機に乗り込んだ。

アレクシーナを中心にリッターとリユーヤが両脇に座る。他にも八人ほどSPが座っている。

「妙だわ」

リッターがそう呟いた。

「人数が多いな。」

アレクシーナがそれに同調し、頷いた。

飛行機の昇降口の扉が閉まる。

「離陸は待て！」

アレクシーナが立ち上がりそう言い放った。

「気付いた時には時既に遅しってね。」

一番前に座っていた男が立ち上がり、こちらを向いてそう言った。それと同時にリユーヤとリッターを除く全員が立ち上がった。手には拳銃が握られている。

リッターはアレクシーナを座らせ、立ち上がり拳銃をリーダー格の男に向けた。

「ハハ。勇ましいことだ。8人相手にたった二人でどうしようって言うんだい？リッター大尉。」

「殺す事が目的ではないようね。何を要求するつもり？」

殺すつもりなら有無を言わず撃てばいい。そうしないには何か理由があるはずだ。

「いや、殺しが目的だよ。」

リーダー格の男はそう言って、片手を軽く上げた。敵のうちの二人が操縦席に向かう。

六人？やれるか？

「殺す前に、いろいろ聞きたい事があってね。」

「馬鹿な真似は止めなさい。ハイジャックが成功した例なんて数える程しかないわよ。」

リッターがそう言い放った。

「俺達はクライ王国開放戦線の者だよ。あんたらみたいに損得で動いちゃいないのさ・・・」

リーダー格の男はそう言った。

「はははははは。」

アレクシーナが声高々に笑った。

「何がおかしい。」

「お前らの可笑しさを笑ったのだ。お前等を含め我々の神は、人を殺すことを戒めている。だがお前らは人を殺す事で事態を思っように動かそうとしている。神の徒を名乗りながら。それを笑わずに何を笑う。」

「黙れ！この魔女が！」

SPのフリをしていた一人が激昂してそう言った。

「テロで人が動かせると思うのか！」

アレクシーナはその男を睨みつけた。

「事はそう単純ではないんだよ。お嬢さん。」

リーダー格の男は拳銃を向けたまま落ち着いた表情でそう言った。

「来るぞ。」

アレクシーナが小さくそう言った。

何が？

そう考える間もなく飛行機が大きく揺らいだ。

第6話「白い光 後編」(前書き)

リユウヤ・アルデベータ、初めての实战に能力を使う。

第6話「白い光 後編」

飛行機が揺れたその瞬間、犯人達の目が一瞬宙に泳いだ。リッターはその隙を見逃さない。銃声が3発連続して鳴り、敵の三人が倒れた。

反撃の銃声が響く。リユーヤはアレクシーナの身を守るようにして椅子の陰に隠れ、リッターも椅子を盾に応戦した。

銃撃が止み、操縦席の方から二人分の足音が聞こえた。

合流したか……

「たいした腕だな、リッター大尉！」

リッター格の男のそう言う声が響くと同時に銃声が響いた。リッター大尉の前の椅子に銃弾がめり込む。

「私が出る。」

アレクシーナは金色に光る護身用の銃を手に取りそう言った。

「そんな危険な真似はさせられません！」

リッターは当然の事を言った。警護役の二人ではなく、VIPがおとりになるなどという話は聞いた事がない。

「状況をよく把握しろ。5対3。私が戦力にならないならば、5対

2だ。この状況で5対2ならば勝ち目は無いぞ。」

「ですが……」

「責任ある者が盾になる。自分の為に命を張る者に、命がけで応えねばよき指導者にはなれまい。ここで散る命ならば私のツキもそこまで……」

アレクシーナはそう言って軽く笑った。

「お言葉ですが、私達の命とあなたの命では重さが違います。あなたの肩にはクライ王国の、引いては世界の命運がかかっています。」

リユーヤはアレクシーナを諷めようとした。

アレクシーナはリユーヤの瞳を見詰め、フツと笑った。

「気持ちは嬉しいが……命に差などないのだよ……私が出

る。これは命令だ。」

リッターが先に立ち上がるうとしたが、アレクシーナがその肩を押さえ制した。

「どうした？遺言でも残してるのか？」

リーダー格の男の声が響く。

「残念だが……」

アレクシーナがそう言い立ち上がる。

「死ぬのはお前だ！」

アレクシーナが発砲すると同時に、アレクシーナの胸や頭に白い光の軌跡が当たった。

リューヤはバツとアレクシーナに抱きつき、彼女を引き倒す。

敵の弾丸は白い軌跡の上を正確になぞり、後ろへ通っていった……。リューヤが引き倒さなければ間違いなくアレクシーナは死んでいた。

「信じていたぞ……」

アレクシーナは震えながらそう言った。

かつて、日本という国に、発射された弾丸を自在にかわすという武道の達人が実在した。それを人工的に作り出す事、それはアルファ研究所の研究課題の一つでもあった。アレクシーナ・クライはその研究の成功例を知っている。

リューヤ・アルデベータはアルファ能力の初めての实战投入に成功した……

第7話「実戦」(前書き)

能力者リユータ・アルデベータ、初めての实戦でその能力を开花する

第7話「実戦」

「二人は撃った。」

アレクシーナはそう言った。

「頭部には命中してませんね。多分防弾チョッキを着込んでいるので、すぐに起き上がると思います。」

リッターはシートの隙間から敵の様子を観察しながらそう言った。

「無駄弾か・・・時間を稼ぐしかあるまいな。」

時間を稼げば機の異常事態は知らされる。幸いまだ離陸はしていない。時間を稼げば稼ぐほど有利になるのはこつちだ。だが、敵もその事は充分考えているはずだ。

「俺が出ます。」

リューヤは二人にたいしてそう言った。

「二人やれば、残りは3人です。敵も無茶は出来なくなるでしょう。」

「実戦は初めてよね。やれて？」

リッターは顔を向けずそう言った。

「やらなきゃ生き延びれないでしょう。」

アレクシーナは目を細めて頷いた。

「任せる。死ぬな。」

リューヤは銃を構え、シートの後ろで立ち上がった。

「うおおおおおお」

リューヤ立ち上がり、敵の頭部に銃弾を打ち込む。白い軌跡を避け弾丸をかわしながら・・・

「馬鹿な！」

敵の一人がそう叫んだ。その一瞬の隙にリッターの弾丸がその敵の頭部に命中する。

「化け物め・・・」

リーダー格の男は口元を歪めながら、銃を乱射した。白い軌跡が

幾本も見える。リユーヤはその白い軌跡の全てをかわす方向へ飛ぶ。次はかわせないな……

リユーヤに注意が向いた隙に、リッターは2人の敵に弾丸を命中させた。

「くそおおおおおおお！」

リーダー格の男は弾切れになった銃のカートリッジを入れ替えようとす。味方のいなくなった状況ではほぼ致命的な動きだろう。

「動かないで！」

リッターが立ち上がり銃を向けた。

リーダー格の男は一瞬動きを止めたが、再びカートリッジを入れ替える作業に入った。

リッターが腕を撃った。低い銃声と共に、男の体が反転する。

「ぐうう。」

「殺しはしないわ。いろいろと喋ってもらう事になると思うけど……」

男は落ちている味方の銃を拾って、自分の頭に打ち込んだ。

第8話「飛行機の中で」(前書き)

リユーヤ、テロリストを排除し、いよいよアルテイル公園に向かう

第8話「飛行機の中で」

アレクシーナ第三王女は破壊された飛行機を乗り換え、すぐに出発した。アレクシーナはテロリストに飛行機が奪われたり自分が人質になってしまふ事を考えて、自分の専用機には爆薬を仕掛けている。今回はその一部を使い、飛行機を揺らしチャンス作った。

すぐに出発する事に異を唱える者は多かったが、

「この程度の事で今回の視察を遅らせたり止めたりはできない。テロリストも即座に出発するとは考えてしまい。」

アレクシーナのその一言で、一行の出発は決まった。今回同行するはずだったSPは飛行場のトイレで死体となって見つかった。アレクシーナは代わりのSPを呼び寄せ、最短の時間で出発した。

飛行機が離陸し、少ししてからアレクシーナは目を瞑ったまま、静かな声で言った。

「大儀だったな。この功労には私も然るべき形で報いる。」

「は！ありがとうございます。」

リッターがそう言った。リューヤが続く。

「私は……………」

「なんだ？」

アレクシーナは目を開けた。

「私は一人しか倒せませんでした。リッター大尉がいなければ私もアレクシーナ様も死んでいたでしょう。しかも主犯格の男を死なせてしまいました……………」

アレクシーナは優しい目をリューヤに向けた。

「お前は身を呈して私を守った。お前は役目をきちんと果たしたのだ。それで充分だろう。」

「は！ありがとうございます！」

「まだ暫く時間が掛かる、お前達も休んでおけ。」

「はい」

「は！」

眠りに落ちたアレクシーナの横でリッターが目を瞑り、リユーヤも目を瞑る。

一応は訓練通りにやれたか……。戦えば人は死ぬ物なんだ。・
・任務だが……。いい気持ちはしない。

リッター大尉はどう思ってるんだ？

リン……。俺は間違えていないかい？きっと君に会いに行く
よ……

第9話「思惑と死」(前書き)

リユール、ついにアルテイル公国に上陸。アレクシーナ、大臣アル・アール、公国の王女それらの思いが様々に交錯する

第9話「思惑と死」

アレクシーナと一行は盛大な出迎えを受けた後、予定通りアルティル公国一番の権力を持つ大臣アール・アールとの会談に向かった。会談室に通されたのはアレクシーナとリッターとリユーヤと通訳の四人だった。アレクシーナに上座の席が用意され、アール・アールはアレクシーナの真向かいに座った。

「我が国へようこそ。アレクシーナ王女様。長旅ご苦労様です。」
アール・アールは一見慇懃な言葉を使ったが、その目の奥には何か不快な物を潜ませていた。

「慇懃なご挨拶いたみいます。社交辞令から入りたいところです。が、お互い忙しい身です。本題に入りましょう。」

「ベータ研究所の件ですか？」

アール・アールは間に挟んである机の上のコップを手に取った。
「もちろんそれもあります。……」

アレクシーナが胸にしまってあった金色の護身銃を抜いてアール・アールに向けた。アール・アールは少し驚いた様子を見せたが、すぐ落ち着いた素振りを見せ、コップを口元へ動かし、静かに言った。
「何のつもりですか？ここには私の兵士もいる。あまり妙な真似をされると王女様と言えど只ではすみませんぞ。」

アール・アールの後ろの護衛が今にも動きそうな気配を見せる。
「動くな！」

アレクシーナはそう言って、アール・アールの脳天に銃口をつきつけた。

「私の国では、王族を襲った者は理由のいかんなく死刑なのを知っておいでか？」

「なんの事かな？」

アール・アールは落ち着いて言った。リユーヤはリッターの方を盗み見たが、動く気配はない。リッターは知っていたのだろうか？

「ベータ研究所を独り占めしようという考えは頂けない・・・あなたは欲をかきすぎた・・・」

「ここに来る前にテロリストに襲われたらしいですが、私はそのような真似はしませんよ・・・リスクが高すぎる・・・」

「それを証明出来ますか？」

「あなたこそ証明出来るのか？証拠も無く一国の大臣を殺せば、あなただつて只では済みませんぞ。いや、下手をすれば戦争だ。」

「そういう理由をつければ、自分のやった事は全て誤魔化せると思うのですか？」

「私はやっていない。その引き金は両国の和平を崩すものだぞ。分かつてるのか！」

アール・アールの体がほんの少し震えていた。

「私が撃てばな・・・」

アレクシーナがそう言つて銃口を離れた瞬間、銃声が聞こえた。

「馬鹿な・・・貴様ら・・・」

アール・アールの背中と胸がみるみる赤く染まる。

「アルテイル家の御命令です。アール・アールは国家をあまりに私的に利用し過ぎると」

アール・アールの背後に立っていた、アール・アールの護衛だった兵達の一人が静かにそう言った。

第10話「公国の老女」(前書き)

リユーヤ・アルデベータ、クライ公国の公女と出会う。アレクシーナと公女との新たな約束、リユーヤはリーンに出会えるのか

第10話「公国の老女」

「アレクシーナ様御一行はこちらへ。アルテイル＝ヘン＝ミュールがお話したいと申しております。」

兵士の一人が言った。

「分かりました。」

アレクシーナはそう答え、兵士の先導に従った。

連れられた先は、一際大きな聖堂のような場所だった。キラキラと輝くステンドグラス。アレクシーナの謁見の間もたいした物に思えたが、こことは比べ物にならないように思えた。

一番奥にある円卓の側の椅子に一人の老女が腰掛けていた。

アレクシーナが跪く。リッターがそれに従い通訳とリユーヤがそれに続く。

「アルテイル＝ヘン＝ミュール閣下ですね。」

「そうです。遠いところをようこそ。」

ミュールは優しい口調で言った。

「お掛けになって下さい。あなたも一国の王女。そのような姿勢は似合いませんよ。……お連れの方にも椅子を御用意して。」

ミュールは下女にそう指示した。

「では。」

アレクシーナが円卓の椅子に座り、リユーヤ達は用意された椅子に座った。

「まず、御無礼のお詫びとアール・アールの誅殺に手を貸して下さった事に礼を申し上げます。ありがとうございます。」

「いえ、こちらこそ国際問題になる前に手を打って頂いた事に深く感謝いたします。」

アレクシーナは頭を下げた。

「アール・アールは有能ではあったけど、私欲に走り過ぎていたわ。」

ベータ研究所の研究結果すら自分の私欲の為に使おうとしていました。お恥ずかしい限りです。あなたにはお礼をしなければならぬわね。」

「・・・・・・・・」

「望みは何？」

「両国の繁栄と平和・・・・・・・・でしょうか。」

「それにはお互いがもっと信頼し合う事が必要ね。」

「は！お言葉の通りで・・・・・・・・」

ミュールはコクリと頷き、言葉を紡ぎ出した。

「ベータ研究所の統括には信頼出来る者を新たに送りましょう。そして・・・・・・・・あなたにベータ研究所への自由な出入り、そして研究成果の自由な利用を認めます。」

「は！有難うございます。」

「危険な事ですが・・・・・・・・あなたがこの研究を悪用する者ではないと信じて許可を出すのです。」

「肝に銘じておきます。・・・・・・・・もう一つお願いがあるのですが・・・・・・・・」

「何かしら？」

アレクシーナは一瞬言葉を止めてゆっくりとした口調で喋り始めた。

「ここにいるリューヤ・アルデベータのベータ研究所への出入り、そしてイレーザ病院特別病棟への出入りを許可して欲しいのです。」

ミュールはリューヤの方へ目を向けた。優しげな目だった。

「あなたが、リューヤ・アルデベータね。」

「は！そうであります。」

「アルファ能力の初めての実戦レベルでの成功例と聞いています。大変な事ですが期待していますよ。」

「は！ありがとうございます」

ミュールはアレクシーナの方を再び向いた。

「ベータ研究所は非常に危険な研究所です。あまり多くの者に入

りさせたくはないわ。」

「……申し訳ありません。」

「ですが、一国の王女に護衛無しと言う訳にもいかないでしょう。護衛一人をつける事を認めます。あなたが誰を選ぶかは私の知るところではありませんが……。」

「ありがとうございます。」

「アレクシーナさん。あなたはイレーザ病院特別病棟の危険度を知っていますね？」

「はい。しかし、これはどうしても飲んで頂かなくてはなりません。先程のベータ研究所への特別なはからいをお返ししてもです。」

アレクシーナは強い目でミュールを見た。

「何故です？」

「この者と約束しました。幼馴染に会わせると。」

病院？病院にいるのか？危険？危険って？

「私は我が国の者がかけた迷惑にお詫びをしなければなりません。分かりました……リユーヤ・アルデベータのイレーザ病院特別病棟への立ち入りを許可しましょう。」

「ありがとうございます！」

アレクシーナはほんの少し嬉しそうな顔をした。

第11話「病棟の少女 前編」(前書き)

リユータ、ついに死んだはずのかつての恋人に出会う。運命渦巻く
第11話

第11話「病棟の少女 前編」

「ここだ。」
公用車から降りたアレクシーナは同乗していたリユーヤにそう言った。

「ここにリーン・サンドライトがいる。」
「……………」

「正直、お前に逢わせるべきではないのかも知れないと何度も思った。だが…………お前には王家の罪を明らかにせねばなるまい……………」

「リーンはどのような状況なのですか？」
「……………会えば分かる。」

そう言つてアレクシーナは病院へ向かい、リユーヤはそれに従つた。リッターと数人のSPもそれに続く。大勢いた報道陣もまいたせいもあり、今はいない。

アレクシーナは病院の奥へ向かいエレベーターの前に立った。

「リユーヤ以外の者はここで待機せよ。」

「は！」

「リユーヤついて来い。」

「は！」

アレクシーナに続きリユーヤもエレベーターに乗る。

エレベータを降り、長い階段を下りるとそこには受付があつた。

髪の高い女性が受付に座っている。

「アレクシーナ・クライとリユーヤ・アルデベータが来た。院長にそう伝えて欲しい。」

受付の女性は少し不審気な顔をしたが、すぐに電話の受話器をとった。

「すぐに参ります」そう受付の女性が言ってからリユーヤにとって長い時間が過ぎた。

リーンに逢える。

その思いが一分を一時間にも感じさせた。

院長らしい男が受付の奥から現れる。

「これはアレクシーナ様。ようこそ。」

「用件はミュール閣下から伝わっていると思うが……。」

「例の患者ですか？」

「そうだ。」

「幸い今は安定した状態です。」

「逢えるか？」

「逢えます。こちらへ……。」

院長はゆっくりと歩き、鍵のついた鉄の扉を何個も開けては閉めて、リユーヤ達を先導した。

こんな所にリーンは閉じ込められているのか？

リユーヤは不安を覚えると同時に怒りを覚えた。

リーンが何をしたと言っただ！

リユーヤは胸に湧く感情を必死に自制した。

「こちらです。」

院長はそう言って最後の扉の鍵を開けた。

「リーン！」

リユーヤは声を上げた。白い清潔感のあるベットのの上にリーン・サンドライトは横たわっていた。その顔色は日光にあまりあたっていないせいかな健康に青白く、その体はあの厳しい訓練に耐えた強さを微塵も感じさせない程弱弱しくなっていた。それでもその面影から間違いなく彼女がリーン・サンドライトである事は分かった。

「リユウヤ？リユウヤなの？」

リンは虚ろな目で「ちらちらを見詰め、ゆっくりとした口調でそつ
言った。

第12話「病棟の少女 中篇」(前書き)

かつて愛した女性リン・サンドライトに異変……失われた
彼女の過去……リユウヤのやり切れない気持ち……何が起
こるのか？待望の第12話

第12話「病棟の少女 中篇」

「リユーヤ!」

リーン・サンドライトは確かにそう言った。リーンは頭を抑える。

「大丈夫か?」

リユーヤが駆け寄る。

「大丈夫……いつもの事だから……」

リーンは弱々しくそう言った。

「横になつてる。」

「うん。」

リユーヤはベットで横たわるリーンの手を握った。

「もう二度と逢えないと思っていた……」

「俺もさ……だけど、こうして逢えた。」

「うん。アレクシーナ様のおかげね……」

「もう大丈夫さ、俺がここから助け出してやる。」

リーンは目に涙を溜めてからゆっくりと首を振った。

「ダメよ。リユーヤ。あなたはあなたのやるべき事があるわ……」

。いつまでも私に関わってはダメ。」

「何言ってるんだ!どんな病気だろうと俺がもつとマシな病院に移

してやる!こんな何重にも鍵をかけられた奥が、君の居場所なんて

あるかよ!」

「いいの……」

「よくない!」

「無理なのだ……リーンはお前が想像出来る範疇を超えた状態

なのだ。」

アレクシーナが冷たく言った。

「ふざけるなよ!リーンが一体何をしたっていうんだ!どういう状態だって言うんだよ!俺の、俺の能力がリーンは正常な状態だと告げている!」

「そうだな・・・こうしている分にはまったく正常なのだ・・・」
アレクシーナは冷静な口調でそう言った。いや、少なくともリユーヤにはそう見えた。

「アレクシーナ様の言ってる事は本当よ。」

リーンがか細い声でそう言った。

「リーン・・・」

「まずい。来る。」

アレクシーナは目を細めそう言った。

「そうなの、本当なの・・・私が・・・私がお前らの存在を遙かに超える存在だという事がなあ！」

リーン・サンドライトは突然声も表情も変えた。

「リーン？」

「ふん。これが 能力者成功例第1号か。お前ら人間もよくやる。」

人間も？何を言ってる？

「一般の症例で言えば多重人格症。信じる信じないは勝手だが・・・悪魔憑きといった状態だ。」

アレクシーナが冷静に言った。

「はははは、悪魔か。お前らに悪魔と神の区別がつくのか？」

「自分が神とでも言うのか？」

アレクシーナが言った。

「そうは言っていないだろう。もちろん否定もしないがな・・・」

なんだこれは？ 能力の開放されたリユーヤの目にリーンの周りに赤黒い炎のようなものが見えた。

「お前が何者かなどという議論はどうだって良いのだ・・・お前の予知が当たる・・・それが問題なのだ・・・」

「くくく。絶望の未来を聞いて抵抗する気になったか？俺に未来を見る能力があるとしても、ここから先、未来を正直に教える保障はないぞ。それは何度俺が事実を教えてやっても、お前らに付きまとう不安だ。」

未来？何を言ってる？

「お前の予知が外れればいい。何度そう思った事か……。」「
リユーヤの体が勝手に動く。」

「去れよ。リーンの体から去れつつってんだ！」

リユーヤの体が青白く輝く。無論一般の目では見えない。リーンの内部にいる何者かにはそれが分かっているようだが……

「能力者か。たいしたものだ。人の身でそこまで力が使えるとはな……。」「

「出て行けと言ってる！」

この相手の存在感を押し返すというのか？想像以上か？リユーヤ・アルデベータ。アレクシーナはそう思った。

「ふふふ。ここまで来てくれた礼だ。お前に未来を教えてやる。お前はこの世界の変動に大きく関わる。それはお前の望まない方向に行くだろう。そして自分の意思の元に進む。その先にある大きな力ラクリに気付きお前は絶望の中を生きる。そして全ての意味を知らるう。」

「ふざけた事を」

院長が注射器を取り出し、リーンに近づこうとする。アレクシーナがそれを手で抑えた。

第13話「病棟の少女 後編」(前書き)

想像の外にあるリーンの実態に、リユウヤ戸惑い慟哭す。

第13話「病棟の少女 後編」

リーン・サンドライトはその後、ベットの上に崩れるように倒れこんだ。

「リーン！」

リユーヤはリーンに駆け寄った。院長が近づきリーンの腕を捲くった。そこには痛々しい注射針の痕が何本も残っていた。その痕の近くに新たな痕が増える。

「能力の研究の過程で、こういう人間が何人も生まれている。大半は無意味な事を言うが、中にはリーンのように非常に価値のある事を言うものもいる。それでも、能力開発の犠牲者である事には変わりないがな。」

アレクシーナは冷静にそう言った。

「あんたら、こんな事になるって分かっていながらやってるって言うのかよ！」

リユーヤはキツとアレクシーナを見据えた。

「そうだ。そして、お前は貴重な成功例だ。」

「うおおおおおおおおお！」

リユーヤがアレクシーナに殴りかかる。アレクシーナはリユーヤのコブシをかわし、腹に膝を入れた。

「ぐっ」

リユーヤがその場にへたりこむ。

「顔でなく、腹なら大人しく殴られてやったものを……」

アレクシーナは静かにそう言った。

「これが、王家のやり方だ。長い特権階級にいる事で腐りきっているのだ。」

リユーヤはゆっくりとアレクシーナの前に立った。その耳元にアレクシーナが口を近づける。

「私は王家を打倒する。お前やリーンのような犠牲者を二度と出さ

ないと約束しよう。そしてリーンを元に戻す方法を考えてやる。協力してくれるな？」

リユーヤは無言のまま動かない。

「リユーヤ。」

リーンの小さな声が聞こえる。リユーヤはリーンの側に駆け寄った。

「アレクシーナ様に協力してあげて。私に出来る事なんてないから・・・私はアレクシーナ様の理想を信じるわ。」

注射を打たれ意識が弱まっているのか、声が掠れるように細かい。「そんな事はない。お前は役にたってくれているぞ。」

アレクシーナはいつの間にかリユーヤの背後に立っており、そう言った。

「ありがとうございます・・・疲れた。休むね・・・。」

リーンが目を瞑るのを待って、リユーヤは病室のドアに向かった。「開けてくれ。」

院長がアレクシーナの顔を伺い、アレクシーナは顔を少し動かし、開けるように指示した。

三つ目の扉の向こうで、リユーヤの叫び声がするのを、アレクシーナは確かに聞いた。

第14話「第七の天使」(前書き)

不可思議なリン・サンドライトの病状。悩むリユータに、アレクシーナが経典の話を持ちかける。第七の天使とは……渦巻く全ての運命の伏線、再び

第14話「第七の天使」

「第七の天使が神になるという話がある。」

ベータ研究所に向かう車の中でアレクシーナは唐突にそう言った。

「第七の天使？」

「我々の経典に出てくる話だ。知らないのか？」

アレクシーナは少し不満気に言った。

「リユーヤは元日本人ですし、この国に来てからはずっと研究所でしたから。」

前に座っているリッター大尉がフォローを入れた。

「そうだったな……」

アレクシーナはそう言っただけで窓の外へと目をやった。

「我々の経典の中には9階層の世界にそれぞれ多くの天使が住んでいるわ。1階層には神に近い存在が住んでいて我々の世界の理を支配しているの。そして第二階層には……」

「経典の説明はいい。第七の天使について話してやれ。」

アレクシーナは苦笑しながらそう言った。経典の説明を天使だけに限って話した所で一時間はかかる。

「はい。……その1階層には9人の天使がいて位があるのだけれど、今話しているのは七番目の天使。一般に第七の天使と呼ばれる存在なのだけれど、彼は天使として人を見ているのだけれど人間に愛着を持ちすぎて、主神から注意を受けるの。「お前は人を愛し過ぎる。我々は全てに対して公平でなければならぬ。」ってね。」

リユーヤはリン・サンドライトの事を一時忘れて聞き入った。

「第七の天使はね。それを聞くのだけれどいつい人間に肩入れしてしまつて摂理を乱してしまつたりしたの。」

リユーヤは目を閉じて静かに聞いた。

「それを知った神はお怒りになつて、それ程人間が好きなら人間になるがいいとおっしゃつて、天使の力を奪い人間に生まれ変わらせ

るの。」

「それで？」

リユーヤが口を開いた。

「この話だけここで終わっているの。結末はそこまで。」

「そうなのだ。経典の中から幾つもの真理が発見されているにも関わらず、この話には何の結論も出されていないのだ。摂理を乱すのが悪いこと、人間以外にも魂があり得る事を示唆してはいるが……結局の所なんの意味があるのかは未だに不明だ……もし第七の天使が人間になったのならば、彼の魂は人間の物か天使の物なのか？神が後継者を作る為に下界に降ろしたという説まで生まれる始末だ。」

「はあ。」

「そう、そして第七の天使は人間の神になった……って話があるわ……後から書き加えられたって説が有力だけど……」

「もし今の世界に第七の天使がいたらどう思うだろうと思ってな。」
アレクシーナは再び苦笑した。

第15話「オリジナル 前編」(前書き)

リーンを救う為に目の前の任務を果たそうとするリユータ。その前に新たな敵？が立ち塞がる

第15話「オリジナル 前編」

研究所の前でアレクシーナとリユーヤとリッターが車を降りた。アレクシーナはゆったりとした姿勢で胸元から封筒を取り出す。

「リユーヤ、我々は研究所内でやる事がある。お前は施設の裏手から登れる山道に入り、この山の頂上近くにある小さな施設に行き、ロード・コーターという人物に私の親書を渡してくれ。」

アレクシーナはそう言っつて王家の紋章の入った封筒をリユーヤに手渡した。

「は！」

「リーンの事は必ずなんとかしてやる。今は私を信じろ。」

アレクシーナはリユーヤの耳元でそう言った。

「いくぞ、リッター」

「は！」

二人が施設への門を潜り抜けたのを見てリユーヤは親書を胸に入れ施設の裏側へ回った。

登り始めて20分が過ぎただろうか？

リユーヤは時計を確認し、時間を確認した。

時計の針はリユーヤが登り始めて15分程しか経っていない事を示していた。遠くから見れば美しい森も、近くで見れば生態系の厳しさを感じさせるものだった。それでもリユーヤは緑の多いこの森に好感を覚えていた。

ざわ

なんとも言えない気配を突然感じた。直接見えないが鬱葱と茂る木々の合間に人の気配を感じるのだ。

「誰かいるのか？」

リユーヤは大きめの声を出して言った。

ぞ

後ろで枯葉の踏まれる音が確かに聞こえた。
リニューヤが振り返る。

そこには長身の痩せた男が立っていた。確かに痩せてはいるが、その微妙な仕草が訓練された者である事を示していた。何か危険で物騒な、そんな気配が漂っている。

「気配は消したつもりだったがな……あなたが 能力者最初の成功例か……」

能力の研究は機密事項である。一般の人間が知っている可能性は低い。

「この施設の人か？」

「まあ、そつだ。やってる事は逆だがな……」

「？」

「まだ知らされてないつて事だな。俺が最初にあんたと出会った。

これも運命という所だな……」

男はそう言つて皮肉な笑みを浮かべた。

「悪いが試させてもらうぜ。」

男はそう言つて皮肉な笑みを消し銃を抜いた。

第16話「オリジナル 後編」(前書き)

アレクシーナの密命を帯び、山を登るリユーヤ。その前に立ち塞がる男……能力者同士、初の激突!!

第16話「オリジナル 後編」

「待つてくれないか？俺はロード・コーターさんに逢いに来ただけだ。」

「知ってるよ。アレクシーナ様の使いだつて事もな。」

「なら……」

「悪いが事はそう単純じゃない。抜きな。俺を倒さなきゃ先へは行かせない。」

「俺にはあなたがそう酷い人には見えない。争いたくない。」

銃声がした。銃弾は足元に食い込む。当てる気はなかったらしい。

「次は当てるぜ。」

「あなた、能力を知ってるのか？」

「銃弾だつてかわすんだろ？どの道俺をやらなきゃ命令を果たせないぜ。」

「後で後悔してもしらないよ。」

リユーヤは銃を抜いた。急所を外して当て、行動不能にするのがBESTだろう。

相手が銃を撃つ。白い光。今度は確実に心臓を狙っている。

殺る気か？

リユーヤは光を避けそう思うと同時に銃弾をかわした。

そしてそのまま射撃体勢に入り、相手の右足目掛けて撃った。

男は半身だけかわし、銃弾を避けた。

今のは？まさか？

もう一度今度は左足目掛けて打つ。

男はまた半身だけかわした。

「驚いたかい。」

男は落ち着いた表情でそう言った。

「あんたも 能力者……。」

「そうだな……あんたとは違う。天然だけだな。能力のオリジナルってとこだよ。」

「日本に二人程いたと聞いていたが……。」

「なにも日本人だけの専売特許って訳じゃないさ。そしてこの能力者同士の戦いではな……。」

リユーヤの目に白い光が無数に見える。

馬鹿な

相手が持っている単発式の銃ではあり得ないはずだった。それでもリユーヤはその無数の光を避ける。必死だった。

それらの全ての光をかわした後、リユーヤは後ろに気配を感じた。後頭部に確かに銃口を向けられている。そういう気配がした……。

「こんな事も出来るのさ……チェック・メイトだよ。ボーヤ。」

「あんた、何者だ？」

リユーヤは両手を上に上げ、微かに震える声でそう言った。

「ミハエル・コーター。ロード・コーターの息子さ……。」

第17話「希望」（前書き）

立ち塞がった天然の能力者は、尋ね人ロード・コーターの息子ミ
ハエル・コーターだった。リユーマを取り囲む環境が変わっていく。
・・・鮮烈の第17話

第17話「希望」

ミハエル・コーターに銃を突き付けられた後、リユーヤは頂上付近にある山小屋まで連行された。

ミハエルとの勝負は明らかに敗北だった。勝敗を分けたのは能力の差というより、経験値から来る物だと思えたが負けは負けだ。

丸太で組み上げられたログハウスのような山小屋の玄関で、リユーヤは開放された。

「この中にロード・コーター・・・父がいる。あんたの親書は無事届くという訳さ。」

ミハエルは気さくな素振りですう言い、玄関の扉を開けた。
「入ってくれ。」

ミハエルはそう促し、リユーヤはそれに従った。
「こつちだ・・・。」

リユーヤは言われるままについて行った。
連れていかれた場所は寝室だった。

「ようこそ。私がロード・コーターだ。」
木製のベットの上に横たわる老人はそう言い、立ち上がった。

「アレクシーナ・クライ王女の親書をお持ちしました。」
リユーヤは胸元に入れておいた王家の紋章の入った封筒を手渡した。

「ありがとう。」

ロード・コーターは封筒を破り、手紙を読んだ。
3分近い時間が経ち、老人は手紙を読み終わりリユーヤを見詰めた。

「君は親書の内容を知っているのかね？」
「いえ。」

「君に関する物は三枚目だな。読みたまえ。」

老人はリユーヤに手紙を渡した。

という事であなたにリユーヤを鍛えて欲しい。我々が再び来るのが一カ月後。期間はそれまでと短いをお願いする。もし引き受けてくれるならばこの手紙をリユーヤに見せ、リユーヤにこれが特別任務である事を伝えて欲しい。もちろん充分な報酬も用意する。米ドルで5万ドル。経費は別だ。

何故、そうまで私がリユーヤにこだわるのか。

システムの初めての成功例という事も確かにある。しかしそれだけじゃない。能力以外にも彼には奇妙な力を感じる。あるいはリユーヤなら、あの予知を止める事が出来るかもしれない。私はそう感じるのだ。

彼は私の「希望」だ。今はまだ荒削りで小さな「希望」かもしれないが、私はそう信じている。

すまぬが願いを聞き入れて欲しい。私は必ず報いる人間だ。きっとあなたの望むような、誰もが幸せを感じれる世界にしてみせる。その為にもリユーヤを頼む。

リユーヤは何故か目頭が熱くなった。アレクシーナの思いがリユーヤに伝わったのだ。切ないほどの思いがその短い文章の中にある気がした。その手紙をリユーヤはゆっくりと折り返しロード・コーターに渡した。

「たいしたお方だ。君はいい主をお持ちだ。」

ロード・コーターは静かに力強く言った。

「は！ありがとうございます。」

「私の方に異存はない。後は君次第だな。強制される訓練はあまりよい結果がでぬからな。」

「私にも異存はありません。短い期間ですが宜しくお願いします！」
リユーヤは声を大にしてそう言った。

第18話「動き」(前書き)

山小屋で 能力者としての訓練を受け、成長していくリユータ。丁度、その頃アレクシーナ・クライの元に一通の手紙が届く……新展開への期待のこもった第18話

第18話「動き」

アレクシーナが発って15日が過ぎた。

リユーヤはその間 能力の応用をマスターする事に心血を注いだ。精神を静かに保つ訓練として座禅を行い、午前と午後に一時間ずつミハエル・コーターと組み手を行った。

リユーヤの吸収の早さはロード・コーターもミハエル・コーターも驚く程のものだった。

「天才だな……」

地に伏したリユーヤにミハエルはそう声を掛け、続けた。

「僅か15日で我々の出来る殆どの事をマスターしてるよ。」

「それでも……あんたには勝てない。」

リユーヤは荒い呼吸のまま言った。

「小技の差、ようは経験の差さ。俺は親父と死ぬほど組み手をやってる。半月程度で抜かれちゃ困るさ。」

ミハエルはリユーヤに手を差し出した。リユーヤはその手を握る。

ミハエルの力を借りてリユーヤはなんとか立ち上がった。肩で息をしている状態だった。

「食事しよう。もうすぐ日も暮れる。」

「ああ。」

リユーヤはそう答えると、ゆっくりと山小屋に向かった。

アレクシーナ・クライは自室で届いた手紙を読んでいた。

三通目の手紙を読み始めてすぐにアレクシーナの顔はみるみる怒気を孕んでいった。

全文を読むとアレクシーナは椅子に座り、ふうと溜息をもらす。

落ち着け

落ち着く事がまず第一だ。

アレクシーナはそう思いテーブルの上にある水を口元へ運んだ。そして、何か思い立ったように立ち上がり、便箋を取り出して何事かを書き始めた。

十分程アレクシーナは手紙を書く事に没頭した。

もしこの事が知れば全ては終わりだ。

アレクシーナは手紙を書き終えて、再び息をついた。

そしてもう一度深く息を吸込み、こんどは電話をかける。

「リッター・フォンフィールドは今日来ているな。」

「はい。」

「すぐに私の自室まで来るように伝えてくれ。」

「は！」

アレクシーナは返事を聞いて、すぐに電話を切った。

第19話「日本へ」(前書き)

訓練の終わりにかけたリューヤの元に一通の手紙。
リューヤ・アルデベータ、日本へ向かう

第19話「日本へ」

「大方コツを掴んだみたいだな」

ミハエル・コーターは食事の席でリユーヤにそう言った。

「教師のおかげだよ。」

「ふふん。心にもない事を言う・・・」

「いや、本音さ。」

リユーヤはスプーンを口に運びながら言った。

「親父がまともに動けなくなつて以来俺もロクに動いていなかったが、それを差し引いてもたいしたものだ。後はどれだけ経験を積むかだが・・・今のままでも一対一での普通の戦いでは無敵だろうさ。」

「そう願いたいね・・・」

「ん？」

ミハエルが反応すると同時にリユーヤが反応する。

「誰か訓練された人間が来る。」

「女・・・だな。この気配・・・リッターさん？」

「なるほど覚えがある・・・」

二人が食事を済ますと同時にノックの音が聞こえた。

「リッター・フォーンイールドです。リユーヤ・アルデベータはいますか？」

「中にいる。入ってきてくれ。」

ドアが開き、リッターが中に入り込んだ。

「リッター少佐（先のテロ事件の功績が認められ階級があがった）・・・お久しぶりです。」

「僅か3週間弱だというのに変わったわね・・・ごぶさたしてます。」

「リッターはベットに横たわるロード・コーターと椅子に座っているミハエルに敬礼した。」

「そうですか？」

「見違えたわ。」

「期待通りに動けるといいと思ってますよ。」

「きつと大丈夫ね・・・ところであなたはアレクシーナ様に特別の忠誠を誓えて？」

(あの話なのだろうか・・・?)

「王族ではなくアレクシーナ様個人にということですか？」

「そうよ。」

「取りあえずの所はですね・・・」

「そんな曖昧な気持ちでは今回の任務は無理よ。」

「誓えばいいんですか？」

「そうね。あなた自身の心に誓ってちょうだい。」

「分かりましたよ。」

リユーヤは目を閉じて何事かを呟いた。

「これでいいですか？」

「合格よ。唐突だけど日本に行ってもらおうわ。」

「え？」

「あなたの故郷よ。詳しい話は後でするわ。すぐに用意をして頂戴。」

「はい。」

リユーヤは自分の着替えなどをバツクに仕舞い込みはじめた。その間、ミハエルはミハエルらしくなく少しマゴマゴし、リッターの方を向いて言った。

「リッター大尉久々だね。」

ミハエルは言った。

「そうね。本当に久しぶりだわ・・・」

「リユーヤを送り届けた後、酒場で一杯どーだい？」

「油断すればいつ刺されるか分からないわよ。」

「君と一緒に本望さ・・・」

「相変わらず口が巧いのね。」

「奢るからさ。」

「大事な先輩を口説かないでくれよ。」

リユーヤが口を挟んだ。

「だそうよ?」

「ふん。都合のいい時ばかり年下ぶりやがる。」

「そんな事はないさ。」

「ところで、リユーヤの訓練はうまく行ったの?」

リッターは話題を変えた。

「そうだな。大概の事は覚えたな。厳しい訓練に耐えてきただけの事はある。」

「そう。良かった……」

「終わりました。」

リユーヤの声が響いた。

「それじゃ行くわよ。」

「はい。」

「お世話になりました。」

リッターはロードとミハエルの二人のコーターに礼を言った。

「お世話になりました!」

リユーヤが敬礼し、ミハエルが敬礼を返す。

「苦しい訓練によく耐えた。そしてよく能力を身につけた。」

ロード・コーターはベットから起き上がりそう言って敬礼を返した。

「いつでも来いよ。次は酒でも飲みながらゆっくり話そう……訓練の事以外をな……」

ミハエル・コーターがそう言うのを聞いて、リユーヤは再び敬礼し、17日間を過ごした山小屋を後にした。

第20話「懐郷」(前書き)

自分が生まれたという日本。そこに戻る事になったリユウヤ。リユウヤは日本でどう活躍するのか？

第20話「懐郷」

リユーヤはリッターの見送りを受けて日本へ向かった。リユーヤは飛行機の機内で自分の長くもない半生を振り返る。

リユーヤは日本からの移民の子である。生まれは日本のはずだった。19年前のクライ王国の内戦の中でリユーヤは両親とハグレ、施設へ預けられた。

戦災孤児であった。当時3歳だったリユーヤに両親の記憶は薄い。ただ目の前で銃弾に倒れた両親の姿は今も思い出す事が出来る。

当時、リユーヤはショックで一時的に記憶を失っていた。いや厳密には今も記憶は戻っていない。両親が死んだシーンが記憶の扉になっており、リユーヤの記憶は制限されている。僅かに覚えているのは自分のファーストネームだけだった。しかし、それも日本側が調べた限りでは該当する名前はなかったらしい。

施設に送られたリユーヤはそこで1年間過ごし、精神の回復を待つて 研究所に送られた。

そこでリーン・サンドライトと出会い精神の孤独を脱却する事になる。

リーンとの思い出は心に残る僅かな華だった。

正直、故郷であるはずの日本に戻る事になっても何の感慨も浮かばない。

バブル景気とその崩壊を経験し再生しつつあると聞く。

平和ボケした飽食と金満と技術とアニメの国。それがリユーヤのもっていた僅かな日本に対するイメージだった。

正直いいイメージではないかもしれないが、リユーヤの日本に対する認識はそんな物だった。

しかし、それでも僅かな望郷の念がない訳ではなかった。今回の任務上肉親に会う事は許されない。だが、日本という国に少しでも好感を持てればいいと考えていた。

期待と不安の混じった奇妙な気持ちがリユーヤの心の中でひしめき合いながら飛行機は進む。

飛行機のゴーという音を聞きながらリユーヤは、まだ見ぬ故郷を思った。

第21話「郷土の土」(前書き)

日本へ上陸したリユーヤ。待ち受けるのは何？言葉の端に出る謎の
教団。リユーヤとアレクシーナの運命はいかに！旋風の第21話

第21話「郷土の土」

成田空港で飛行機を降り、リユーヤは出迎えの車を見つけた。「シルバーのスカイライン」ということ、そしてナンバープレートのナンバーが伝えられていたので、意外と早く車を見つけた。

車の窓をノックする。窓が開いて筋肉質の男が顔を出した。

「なんだ？」

「ライターを貸してくれないか？」

「タバコかい？」

「いや、風向きを知りたくてね・・・」

「乗りな。」

用意された合言葉だった。リユーヤは、元々両親が日本人だった事や 研究所で学んだおかげで、日本語は堪能だった。

リユーヤが後部座席に乗り込むと車はエンジン音をたてて発進した。

運転席には筋肉質の男、助手席には背の高いほっそりとした若い女が座っていた。

「話は聞いている。進藤 龍也・・・いやリユーヤ・アルデベータの方がいいか？」

男の振る舞いはどこか暴力臭を匂わせる。恐らく暴力の専門家だ。

「進藤 龍也でいい。」

「俺の名前は聞いているかい？」

「西城 真治だろ？」

「そつだ。連れを紹介しとくぜ。佐藤 陽子。現在「紫炎教」に潜入している。これからのあんたの相方だ。」

「陽子でいいわ。よろしく。」

佐藤 陽子と呼ばれた女は少しリユーヤの方を向いて会釈した。

シートベルトが窮屈そうだ。大きい目の目がリーン・サンドライトを少し思出ださせた。

「よろしく。」

「あんたも日本人だそうだが、久々の故郷の土はどうだ？」

西城が言った。

「大きな都市の側はどこだって排ガス臭いさ。それを差し引きや悪くはないね。」

リユーヤは強がるように言った。この西城という男には何故か反発心が生まれる。

「そうか、これからもっと排ガス臭い所にいって、そこから森の奥に向かって貰う。」

「トーキョーにそんな森があるのか？」

「いや、先方はもうアレクシーナ様の動きを知ってるのさ。あんたが飛行機に乗ってる間に既に一悶着あったって訳だ。」

「どういう事だ？」

リユーヤは訝しげに聞いた。西城は答えず、代わって佐藤 陽子が答えた。

「教祖 紫炎はあなたの事も知っていたわ。当然私がスパイだという事もね……」

「たいした情報網だよ。」

西城は不満気にそう言った。

「どういう事だ？」

「紫炎は神のお告げで知ったと言ってるわ……今回の事を考えると本当かも知れないと思うわ……」

「能力者？」

「そう言うの？日本では先見とか遠心通とかいうのだけれどね。私は最近まで偽者だと思っていたわ。」

「おいおい、超能力なんてもんが本気であるって考えてるのか？お笑い草だぜ……」

西城は笑って言った。

「そうね。特殊な情報網があるだけだと信じたいわ。」

「裏切り者がいるんじゃないかねーのか？単に。」

「私を疑っているの？」

「それしかありえねーからな。」

リユージャは二人の喧騒を静かに聞き入った。

第22話「アレクシーナの功績」(前書き)

目的地へ向かうリユールや達、日本にいるエージェント、西城と陽子と共に紫炎教への潜入を計る。その車中で語られるアレクシーナの意外な一面……加速する物語……進展の第22話

第22話「アレクシーナの功績」

「私がアレクシーナ様を裏切ってるって言うの？」

陽子は感情を激しそう言った。

「俺としてもそこは納得いかんさ・・・俺達がアレクシーナ様を裏切る理由が無い。裏切るなら金、恋人でも出来たかってとこだが、お前がそれで裏切る様な性格じゃないのは分かってる。ただな・・・」

「何よ。」

「洗脳されたって可能性はあるぜ。」

西城は粗暴ではあるが冷静な口調で言った。

「私は洗脳されたってアレクシーナ様を裏切らないわ！」

陽子の口調は激しい。余程頭にきているのだろうか？

「それをさせるのが、マインドコントロールであり洗脳だろうが。」

西城の口調はあくまで冷静だった。

「私達がアレクシーナ様に受けた恩がそんなに軽い物なの？」

陽子は泣き出しそうな声でそう言った。演技であるとするればたいした物だ。

「お前がそうなのは知ってるさ・・・だが他の連中だってそうだが、これらの件を知ってるのは日本じゃ俺達だけだ。お前が教団に潜入している間に催眠術か何かを掛けられたって可能性は充分ありうる・・・」

「話しの腰を折って悪いが」

リユーヤ「龍也は重い口をやつと開いた。

「そのシエンって男が 能力者である可能性はあり得る・・・」

「超能力か・・・俺には信じれんね・・・」

「悪いが俺は拳銃の弾だつてかわせる。」

「知ってるさ。だがそいつは特殊な訓練で、人の微妙な動き・・・動作を無意識に読めるようになっただけじゃねーのか？」

「銃弾の弾の軌跡が白い光で見えるんだよ。兆弾だろうとね。そういう能力が存在しないと考えるなら、人間の脳は物凄い量の情報を一瞬で処理してらって事になる。」

「人間の脳は通常30%くらいしか使われてないと聞かされた。」

「使えば体が・・・この場合脳がもたないからリミッターがかかっていると考える方が普通だろ。脳がそういう処理が出来るとしても、そういう能力が存在しないと断定はできないだろ。実際俺は能力者の一例を見てる。」

「そうかよ。超能力者様の言う事はいちいち理にかなってらあ。」

西城は嘲笑するようにそう言った。

「だがな。こいつが裏切ってる可能性だってゼロじゃないだろうが。今回の件、詳しい話は聞かされてないが、アレクシーナ様の進退に関わるほど重要な問題と聞いている。失敗も許されない。俺達はアレクシーナ様には借りがある。そいつを返さなきゃならねーんだ。用心するに越した事はねーだろうが。」

「借り？」

「私達は・・・」

陽子が口を開いた。

「孤児なんだよ。」

西城がそう言った。

「アレクシーナ様の母君が俺達の孤児院を通常以上の状態にしてくれた。そして充分以上の教育を受ける権利をくれたんだ。そしてそれは、アレクシーナ様が実際の権限を握られてからも変わらない。小さな頃に遊んでも頂いたよ。アレクシーナ様は今も俺達の弟分や妹分、ようは同じ孤児院の連中に、充分なものをくれてる。アレクシーナ様の肩に俺達家族の命運がかかっているんだよ。俺達にこれだけの事をしてくれたアレクシーナ様に俺は借りを返したい。その為に慎重になって悪いか？」

西城の語気も荒かった。

「・・・私は裏切ってないわ。」

「信じたいさ・・・だが、紫炎のやろうが超能力者・・・能力者やらだとしたって危険な事には変わりねーだろうが！」

西城の苛立ちはどうやらそこから来ていたらしい。それが不満として湧き上がってきていたのだ。

「俺がなんとかしてみろさ・・・その為に俺は日本に来たんだからな・・・」

リユーヤはリン・サンドライトの事を思い出した。孤児を助けているのは自国の事だけではなかったのだ。リユーヤはアレクシーナの言葉を思い出し、少しだけ安心した。

第23話「不安」(前書き)

新たな展開。紫炎とは何者か？アレクシーナを襲う不安を描く第2
3話

第23話「不安」

「リユーマー一人で大丈夫でしょうか？」

リッター・フォンフィールド少佐は言った。

「どうだろうな。うまくいかねば私も終わりだ。」

アレクシーナ・クライ王女が答えた。

「私も同行出来ればよかったです……」

「あからさまな外国人が行けば目立つ国だ。今回の任務から考えて目立つ事は出来るだけ避けたい。それに……」

「それに？」

「サイジヨもサトーも信頼できる部下だ。」

アレクシーナは窓から外を眺めながらそう言った。リッターは膝上で手を組んだまま言葉を続ける。

「「シエン」とは何者なのでしょうか？」

「恐らく 能力者だな。」

アレクシーナは目を細める。

「日本でも能力者の開発を行っている？」

「それは分らんが……シエンは天然タイプらしい。リーン同様何者かの干渉を受けている可能性が高い。シエンは「神」と言っているがな。」

「リーン？」

「我が国の 能力者の特殊タイプだ。お前の知らない人物だったな。」

「は……」

「日本には八百万の神がいるらしい。」

アレクシーナは苦笑し続けた。

「そんなに神がいるのでは何を信じていいか分からなくなりそうなものだ……」

「はあ、我々の宗教観とはかなり違いますね。」

「意外と我々を動かす「神」とやらは多くいるのかもしれない・・・」

「「神」ですか」

「お前は本心から「神」を信じているか？」

リッターは少しまごつく。

「ハッキリとは言えませんが、信じているつもりではいます。」

「我々の思慮を大きく上回る存在は一応確認している。」

「そうなのですか？」

「そうとしか考えられない事があるのだ・・・問題はその存在が人間にとってプラスなのかどうかなのだが・・・なんとも言えん。」

「はあ。」

「シエンについている存在が敵なのか味方なのか？そこが分かれ道になる・・・出来れば私が直接シエンと話してみたのだが・・・」

「」

「届いたのは脅迫状では？」

「金を要求する訳でも、政策の転換を求める訳でもない脅しの文章を、額面通り脅迫状とするのは馬鹿げた話だ・・・」

「何らかの交渉のテーブルに着かせる為の方便という事ですか？」

「そうだな・・・真意は掴みきれないが・・・。意外とリユーヤ自身を狙っているのかも知れん。」

「能力者の事も知っているといるという事ですか？」

「可能性は否めんな。」

アレクシーナは窓の外を眺めたまま、静かにそう言った。

第24話「講堂の少女」（前書き）

リユーヤ、ついに紫炎に出会う。知られざる紫炎の正体が今明らかに！新たな運命の輪に取り込まれるリユーヤ。最新の24話

第24話「講堂の少女」

リユーヤは西城の名前で借りたレンタカーを降り、佐藤 陽子と共に大きな屋敷の門の前に立った。日本の新興宗教のそれらしく、屋敷は若干華美で胡散臭さを感じさせる。

車に乗ったままの西城は「何かあったら連絡しろ」と言って、近くの山林へと車を走らせて行った。

陽子が門についた呼び鈴を鳴らす。

鬱蒼と茂った森の中はひんやりとした物を感じさせる。能力者のリユーヤには森の静謐な雰囲気は落ち着きを与えてくれる。大きな宗教施設に有り勝ちなザワザワしさは感じない。余程良い場所なのか、シエンとやらが余程しつかりした人物なのか今の所判断がつかない。

そう考えてる内に門が開いて、巫女姿の少女が二人現れ出迎えた。二人共、美少女と呼べる位の美しさがあった。双子のように似ている印象を受ける二人だ。巫女姿というのがそういう感覚を助長させているのだろうか？

「お待ちしております。」

少女の一人がそう言った。

「紫炎様がお待ちです。」

代わってもう一人の少女が答えた。

「進藤 龍也様をお連れしました。」

陽子は先程までの気丈な姿が嘘のように弱弱しくそう言った。

リユーヤと陽子は二人の巫女に導かれるままについていく。

「龍也様、私は馬渡 鈴と申します。」

「私は、斉藤 鋼と申します。」

二人の巫女は代わる代わる言った。それに対しリユーヤはぶっきらぼうに名乗った。紫炎教の連中は敵だという感覚がはっきりとあった。

「進藤 龍也という。」

「存じております。」

「存じております。」

鈴と鋼はまた代わる代わるそう言った。

「世界の命運を背負うお方だと聞かされております。」

鈴はそう言った。

「そんなもんじゃない。」

リユーヤがそう言うのと鈴と鋼は薄く微笑んだ。

「陽子さんはこちらでお待ちを。」

鋼は休憩室と書かれた部屋の前でそう言った。俺達を切り離すつもりだろうか？だがここで揉める訳にはいかないし、紫炎との会話次第では陽子に聞かれて困る内容もある。秘密を持つ者は少ない程いい。

「ここで待つてくれ。」

リユーヤはそう促した。陽子は一瞬不安そうな顔をしたが、リユーヤと二人の巫女に従った。リユーヤの様子から何かを感じ取った様子だった。

「はい。」

そうか細く言って陽子は休憩室に入った。

それから3分程歩いて、リユーヤは大きな講堂の前まで連れていかれた。先程の休憩室がある建物とは別棟だった。

「この先に紫炎様がお待ちです。」

「私共はこれで・・・」

そう言って、鈴と鋼は静かな足取りで去っていった。

暫くして、リユーヤは意を決して講堂の扉を開けた。一国の王女を脅す程の相手と対峙する為には覚悟を決める必要があった。

「龍也様、ようこそ紫炎教へ。歓迎致します。」

講堂の奥から少女の声が聞こえた。

リユーヤは奥に一人座っている少女に近づいていった。

「紫炎に用があるんだが」

「私が紫炎ですが、そうは見えませんか？」

少女はあどけない表情でそう言った。

「あんたがアレクシーナ王女に無理な要求をしたっていうのか？」

少女は円らな瞳を湛えた鋼や鈴とは違ったタイプの美少女だった。鋼や鈴が凜とした美しさを持っているとすれば、この少女は初心^{ウツ}さが美しさを際立たせているタイプだ。

「正直に脅迫状と仰ってよろしいのですよ。」

「そう言えと言われたのか？ 黒幕がいると言ってくれないか？」

リユーヤは自分の納得のいく答えが欲しかった。

第25話「未来を知る者」(前書き)

リユーヤ、紫炎教教祖と会う。奇妙な邂逅が生む新たな展開。リユ
ーヤは任務を果たせるか

第25話「未来を知る者」

「自分が信じたい事が世の全てとは限りませんよ。」
紫炎は言った。

「あんたみたいな子供が一人で教団を作れるはずがない。バツクに誰がいるのか教えてくれないか？」

リユーヤは疑い深げに言った。

「私は教団を作ったりはしていません。私の不思議な能力と教えに集まってくれた人がいるだけです。」

「それだけで、これだけでかい建物が手に入るとは思えないな。裏で意図を引いてる奴がいると考えるのが自然だろ？黒幕を吐いてくれないか？」

リユーヤはあくまで黒幕を吐かせようとした。

「この土地は山主様の好意でお貸し頂いているだけです。やましい事など何もしていません。」

「あなたが脅迫状の主だというのか？」

「そうです。」

紫炎は幾分冷やかな態度でそう答えた。

「なんの目的でアレクシーナ王女を脅した？」

「ご想像通りです。アレクシーナ王女と話し合いの機会をもちたいと思っております。ただ、彼女と話すのはもっと先の機会となるでしょう……」

紫炎はどこか遠くを見詰めるような眼差しでリユーヤを見詰めた。

「未来が分かるのか？」

「多くの事は分かりませんが、少しは分かるつもりであります。」

「能力者か。」

リユーヤが呟いた。

「？」

「こつちの話した。」

「そうですね。」

「何の目的でアレクシーナ王女と話す機会を得ようとしたんだ？」

リユーヤは手早く本題に入るつもりでそう振った。

「あの方もあなた同様この世界の理に大きく関わる方。未来を変える為にあなたとアレクシーナ王女と話しをする必要があったのです。」

「未来を変える？」

アレクシーナの手紙の中にも「あの予知を避けれる」という言葉があった。それが何か関係あるのだろうか？

「そうですね。今のまま行けばきつと未来は絶望的な物となるでしょう……。あの方もそれをご承知のはず。」

「絶望的？」

「この先、人は悪意に飲まれ全滅してしまいます。いえ、少数の人は生き残るのですが……あなたとアレクシーナ王女はその運命を変える鍵となります。」

リユーヤは笑った。

「そんな与太話を信じる程俺はいかれちゃいない。」

「そうですね？では何故アレクシーナ王女はあなたにそれを匂わせる事を告げたのでしょうか？」

「手紙の事を知っているのか？」

紫炎はコクリと頷いた。あの手紙の文面を知り得たのはリッターとアレクシーナ本人、ロード・コーター、ミハエル・コーター、リユーヤしかない。この中の誰かが紫炎とつながりがあり、情報を漏らしたのだろうか？高レベルの能力者の目を盗んで、あの山小屋に入る事は不可能に近い。裏切りがあったか、紫炎自体が極めて高レベルな能力者であるか。その二つしか考えられない。

「どうやって知ったんだ？」

「信じて貰えるかどうかは分かりませんが、私は夢で様々な事を知ります。これもその一例に過ぎません。知るべき事を知るべき時に知る事出来るのが私の力です。」

「なんでもお見通しって訳かよ……」

「全てではありませんが他人より多くの事を知る事が出来ています。」

「まあいいさ。本題に戻させて貰うが、俺やアレクシーナ様に何をさせたいんだ？」

「アレクシーナ王女とは、また逢う機会がありますのでその時直接お伝えしましょう。」

「何の為に俺が来たのか分からないな……」

「いえ、あなたにはやって頂く事があります。」

「あんたの脅迫状が只の脅しだと分かった以上、俺達があんたに従う義理はないが？」

「アレクシーナ様は聡明な方です。秘密を漏らされるリスクを冒すよりも、私のご依頼をお受け下さる方を選択されます。」

紫炎はあくまで冷静にそう言った。

第26話「運命」(前書き)

リユーヤの前に提示される運命……それは受け入れ難い物だった……紫炎とそれぞれの運命が今、交錯しはじめる

第26話「運命」

「覚悟は出来ましたか？」

紫炎は落ち着いて言った。リユーヤは納得がいかないといった顔で、紫炎の方を見据えた。

「俺があんたのいう事を聞かなきゃならない義理はない。」

「アレクシーナ王女の秘密を伏せておく。それでは不足ですか？」

リユーヤは確かにアレクシーナに忠誠を誓っている。それはリオン・サンドライトの為であり、王家による犠牲者を増やさないと、自分の国の為でもあった。だが、これは建設的な事ではない。アレクシーナを女王にし、国を救うという仕事はやりがいがあったが、アレクシーナの秘密を公開するといった脅しを抑える事の為には積極的な気持ちにはなれなかった。

「俺の気持ちは無視されるのか……」

リユーヤは軍部の人間にあるまじき言葉を呟いた。

「私としても、あなたがやりたくないというなら無理強いはできません。ただ……」

「ただ？」

紫炎は表情を強張らせ一瞬躊躇した。

「……このままでは、あなたの思い人であるリオン・サンドライトは高い確率で苦しい思いをして死ぬ事になります……」

リオンが死ぬ？

「どういう事だ！」

リユーヤは紫炎に詰めより肩を掴んだ。

「痛い……」

紫炎は弱弱しくそう言った。リユーヤはハツとして肩から手を離し「すまない」と言った。

「リオンが死ぬってどういう事なんだ？」

リユーヤの声も弱弱しくなっていた。

「夢であなたの事を見ました。」
リユーヤは小さく頷く。

「その中であなたはとても激しい運命の荒波に揉まれます。その過程であなたはリーン・サンドライトを失うのです。あなたは……」

紫炎はそこで言葉を止めた。そしてゆっくりと横に首を振り、「
言えません。」と言った。

「知ってる事は話してくれ。」

「私は自分が関与する予知を言うべきではないのです。」

「あんたが関わるのか？」

紫炎は静かに頷いた。

「言えるのはここまでです。」

リユーヤは当惑した表情で紫炎を見詰め、暫くしてから口を開いた。

「あなたの予知はどれくらいの割合で当たるんだ？」

リユーヤは静かに言った。

「私が関与しなければ100%です。」

「あんたが関与している……それは予知が回避出来るという事なのか？」

「どうでしょうか……うまく危険を回避する事はあります。ですが、今回のようなケースは稀です。放置しておいても私は、少なからずあなた方に運命の歯車の一つとして関わってしまう。私がこのような形を取ったのは運命を変える為の苦肉の策なのです。」

「俺があんたの依頼を受ければ運命は変わる？」

「可能性はあります。ただ、あなたが背負うものは誰よりも大きい。その中であなたにどれ程の選択肢があるのか私には分かりませんが、それでもなお、あなたが私の依頼を受ける事を勧めます。私には他に手立てが見つからない。」

「あんたが関与しているにも拘らず、放置しておけばリーンは死ぬ。そういう事か？」

紫炎は静かに頷いた。

第27話「伝説の宝珠」(前書き)

リーンの死を告げられたリユーヤに課される新たな任務は、紫炎からのものだった。リユーヤはリーンを救う事が出来るのか！鮮烈の
第27話

第27話「伝説の宝珠」

「それが本当なら俺はあんたの依頼を受けざるをえない。」

リユーヤは観念するように言った。紫炎が頷く。

「俺に何をさせたいんだ？」

「少し突拍子もない話なのですが」

「？」

「伝説の宝珠を探して頂きたいのです。」

「伝説の宝珠？」

「その宝珠を持った物はあらゆる願いを叶えられると言われるものです。」

「……そんな物があるのか？」

リユーヤは途端に馬鹿馬鹿しい思いに捉われた。伝説は只の伝説だ。そんな都合のいい物があるはずもない。伝説に残っているような物はトレジャーハンターが探し尽くしているはずだ。よしんばそんな物がまだ残っていたとしても、長い年月をかけて探されて見つからなかった物が、リユーヤ一人の手で発見出来るわけもない。

「あります。そして私はその宝珠の隠し場所に至る方法も知っています。」

「なら、なんで自分の手に入れない。そんな便利な物があるなら、自分で取りにいけばいい。」

紫炎は首を振った。

「宝珠は持ち主を選ぶのです。認められない者は宝珠に近づく事すら出来ません。」

「俺にその資格があつて、あんたには無いって言うのか？」

「可能性の問題です。あなたは私よりは遥かに高い確率で宝珠に近づく事が出来るでしょう。」

「それを手に入れてあんたに渡せばいい？」

「私が持つよりアレクシーナ王女か、あなたが持つ方が適任と思わ

れるのですが……」

「自分より見知らぬ俺やアレクシーナ様を信じるのか？俺には分からないな……」

リユーヤにはこの少女の精神構造がどうなっているのか分からなかった。そんな便利な道具があるのなら、自分が持ちたいと思うのが普通だろう。よしんばその怖さを考えているにしてもアカの他人に持たせる事は考えられない。

「私には宝珠を制御する事は出来ないでしょう。今の所、私が見出せる適任者はあなたとアレクシーナ王女だけです。」

「アレクシーナ様はともかく、俺はどうだろうな……きっと好きなように使う。」

「そうでしょうか？」

紫炎は涼しげな目でそう言って続けた。

「そうですね、あなたはまずリン・サンドライトの命を救おうと考えるでしょうね。そして、それは結局全ての命を救う事に繋がると思えます。」

リユーヤは立ち尽くしたまま、紫炎の言葉を聞いた。

第28話「第三の男」(前書き)

動き出す運命……リユーヤはリーンを救う事が出来るのか？

第28話「第三の男」

「その宝珠とやらを俺はどこに取りにいけばいいんだ？」

リユーヤは少し決心したような口振りになっていた。

「中国山脈、G山・・・そのどこかに宝珠に至る道があります。」

「山か・・・」

リユーヤがそう呟くと、紫炎の横にある白い蠟燭の炎が微かに揺らめいた。

「そこで宝珠をとってきてあんたに渡せばいいのか？」

「そうですね。あなたが扱いに困れば私が預かりましょう。」

紫炎は薄く微笑んだ。

「これで話しは終わりかな？」

「いえ、その道を探す為の小道具があります。」

紫炎は懐中から、三つの数珠を取り出した。赤、青、黄色の三種類だった。ニスでも塗っているのか酷く光沢があった。

「これは？」

「腕に嵌めておいて下さい。それぞれの数珠がきつとあなたの力となるでしょう。」

リユーヤは三色の数珠を受け取り、腕に嵌めた。なんとも言えない感覚を受ける。能力が微かに反応しているのだ。自分の力が増幅される感覚だった。つけていて悪い感じはしない。

「では、宜しく願います。」

そう言っつて紫炎は深々と頭を下げた。その直後に後ろのドアが開き、風が吹き抜けた。

振り返るとそこには鈴と鋼がいた。

「陽子さんと西城さんが門のところでお待ちです。お急ぎください。」

リユーヤは導かれるまま門まで歩き、佐藤と西城に合流する。

「うまくいったのか？」

「俺次第だろうが……アレクシーナ様の秘密は守れるよ。」

「そうか。」

リユーヤが車に乗り、西城が車を走らせ始める。

「？」

リユーヤが何かに反応する。

「どうした？」

西城が粗暴な調子で聞いた。

「何か、嫌な感じがした。もう感じないけどな。」

「そうか……」

リユーヤは一抹の不安を覚えながら紫炎の館を後にした……

「いい加減姿を御現しになったらいかがですか？」

男が紫炎の講堂の扉を開けた。紫炎の横には鈴と鋼が身構えていた。

「紫炎。我々を裏切るつもりか？」

「我々ではなく「あなた」をでしょう。」

「宝珠を奴に渡すつもりとはな……」

「いけませんか？」

「いや、その方が計画が進む。」

「あなたの思う通りにはいきませんよ。」

男は不敵な笑みを浮かべた。

「どう動こうと所詮籠の中の出来事だ。紫炎……お前もボウーヤもそれを思い知るだろう……」

第29話「西城の憂鬱」(前書き)

伝説の宝珠を求め、動き出す3人。様々な思いが交錯して西城を悩ませる

第29話「西城の憂鬱」

リユーヤ達は紫炎の館を後にして、中国山脈のG山に向かった。

車の運転は西城である。

「片道二日の旅程だな。」

西城はそう言って溜息をついた。

「それくらいはかかりそうだな。」

リユーヤがそう返した。

「今回ばかりは任務達成出来るとは思えんな。なんせ無い物を探して来いって事だからな。」

「そうかもしれないが一応行っておかなければ、アレクシーナ様に言い訳が立たない。やれるべき事はやっておかなければならないさ。」

「正論だよ。」

西城はそう言うのとタバコを取り出し銜えた。

「能力者のあなたから見て紫炎はどう見えたの？」

陽子が慎重な口振りで口を開いた。

「ただの少女に見えたさ・・・一見はね。」

リユーヤは呟くようにそう言った。

「だけど、何かとんでもない物を抱えてるようにも見えた。単純に気量だけを見れば俺の方が遙かに勝るし、最初に現れた鈴と鋼にすら一見では気量が劣る。ただ・・・」

「ただ？」

「能力者は見た目の気量だけでは力は測れない。少ない気量でも、システムと呼ばれているものにうまくリンク出来れば多くの事を知る事が出来る。」

「紫炎は本物の超能力者なの？」

「その可能性は高い。ポテンシャルも相当なものだと思う。」

「では、アレクシーナ様の事もそのシステムとやらでしったのか

しら………」

「ふん。紫炎が本物の超能力者ならお前の頭の中を覗くだけで十分な情報は得られるさ。」

西城は不貞腐れたように言った。

「私の頭の中を覗いてた………」

「分からないね。そういう事もあり得るかもしれないけど、俺はもつと別の物を感じた。」

「………」

「きつと紫炎も、俺の幼馴染同様何かに憑かれてる。それが人間にとって良い物なのかどうかは分からないけどね。」

「俺達の相手は本物の化け物かよ。笑い話にもならないぜ。」

西城は相変わらず不貞腐れたままだった。

「それでも、俺達は現状では紫炎に従う以外はない。アレクシーナ王女に被害を出さないには、他にいい方法があるとも思えない。」

「手っ取り早く始末した方が良かったんじゃないのか？」

「その選択肢ももちろん考えてある。……だけど、アレクシーナ王女から拝した命令は、あくまで交渉だった。紫炎かそのバックにいる者が自分の命の危険に備えてないとは思えないからだろう。」

「ふん。俺はどうせ単細胞さ。」

西城は不貞腐れた顔を一層不貞腐れさせた。

第30話「荒事」(前書き)

伝説の宝珠を求め、G山に向かう3人。だが、動いていたのはリュ
ーヤ達だけではなかった……

第30話「荒事」

「ここまででは車で登れる。昔はこんな所に駐車場なんか無かったらしいぜ。」

西城は駐車場に入りながらそう言った。

車が止まり、三人が降りる。

「自然の豊かな所ね・・・」

陽子は空と山の境目を見なが言った。

「神社の境内に行つてどこを探索するか考えよう。」

「そうだな。神社を中心に怪しい所を探してみるか。」

西城はそう言つてから呟くように低い声を出した。

「尾行されてる。俺が何とかするからお前らは先に行け。」

陽子が頷く。

「俺が相手をした方が確実だ。」

リユーヤも小声で言った。

「虎の子のお前に万が一があっちゃ困るのさ。紫炎の言つてる事が本当なら、宝珠とやらはお前にしか見つけられない。俺が困になつた方がいい。」

「だが・・・」

「お前には陽子も守つてもらわなきゃならん。それに、アレクシーナ様にお前を守つてくれと頼まれてる。」

「分かつた・・・」

「こういう荒事には慣れてるさ。せいぜい連中の気を引くさ。」

西城は自信有り気な表情を見せた。

「分かつた。必ず後から追いついてくれ。」

西城は頷く。

「走るぞ！」

リユーヤは陽子の手を引つ張つた。

二人が山の中へと消えた後、西城はタバコに火を点けて携帯用の

灰皿を取り出した。

四人か・・・少しばかり骨が折れそうだな。

西城は何食わぬ顔でタバコを吸い続けた。

アスファルトの坂道を喪服姿の四人組が歩いて来る。そして西城の目の前を通り抜けようとした瞬間西城が口を開いた。

「こんな山奥で葬式かい？」

一人が怪訝そうな目で西城を見る。

「何か用かね？」

四人組の一人がそう言った。

「それはこっちの台詞だな。随分前からつけてるのは分かってる。」

そう言つて西城がタバコを捨てると同時に4人組の男の一人が西城の顔目掛けて拳を放った。西城は突発的に見えた拳を屈んでかわした。西城にして見れば予想通りの動きだった。

西城はそのまま体のバネを効かせて相手の顎に頭ツキを敢行した。一人が倒れる。

西城はそのまま二人目の鳩尾に拳をめり込ませた。

西城が荒事に慣れていられるというのは事実だった。普段は酒場の用心棒をしている。酔っ払いやヤクザとの喧嘩もかなりの数をこなしていた。

それでも4対1はあまりに不利だった。

西城の拳が相手の鳩尾に入った瞬間、西城は背中に鈍い痛みを感じた。動き方が一步遅れれば後頭部に入っていたはずだ。

西城が振り返りざまに裏拳を放ったがそれは空しく空を切った。

西城が相手を目視すると、相手はスプレーを目の前に向けていた。

まずい・・・

西城がそう思うと同時にスプレーを吹きかけられた。

西城が目と鼻を覆った時にはガスを少し吸込んでいた。

西城の巨体がゆらりと崩れる。

その瞬間、側頭部に鈍い痛みが走り意識は遠のいていった。

第31話「リユージャの誤算」(前書き)

倒れる西城、追い込まれるリユージャと陽子。三人に血路はあるのか？

第31話「リユーヤの誤算」

リユーヤと陽子は山中の獣道を走った。撒ける自信は無かったが、西城が足止めをしてくれている間に出来るだけ距離を取りたかった。彼らが何の目的でリユーヤ達を追いかけていたのか分からないが、西城が捕まっていれば目的や紫炎の事は喋らされるだろう。最悪アレクシーナの事も喋らされる。ここから無事に帰ったら、アレクシーナに判断を仰がねばなるまい。

リユーヤと陽子は追っ手を振り切る為に走った。

「真治は無事かしら？」

陽子が走りながら言った。

「さあね。相手が複数のプロだったら荷が重いだろう。」

リユーヤはそう言うってから足を止めた。

「どうしたの？」

「随分距離を稼いだ。少しペースを落とそう。」

リユーヤは体力の配分を考えていた。悪いケースでは、リユーヤが一人で数人のプロを相手にしなければならぬ。走り疲れて戦えないでは話しにならない。

複数のプロを相手に陽子を守りながら戦い切れるだろうか？追って来ているのが西城が足止めた部隊だけとは限らない。不安要素は山積みだったし、考えておかねばならない事も山程あった。

「陽子、一人で山を降りれるか？」

「え？」

「宝珠探しは一時お預けだ。」

「.....」

「最悪のケースは俺達三人が捕まって、アレクシーナ王女や紫炎に何の連絡もつかないという事だ。一人が逃げ切れればアレクシーナ王女も紫炎もなんらかの手が打てる。それを考えれば二手に分かれて逃げた方がいい。日本で目立つまいと思えばそうそう大人数の山狩

りは出来ないはずだ。それを考えても二手に分かれた方が助かる可能性が高い。」

「でも、私にはあなたを守るといふ任務があるわ。」
リユーヤは足早に歩きながら、難しい表情で言った。

「無理だな。あんたもそれなりに訓練を受けてるだろうが、相手が複数のプロなら銃器もなしで立ち向かえる相手じゃない。それに・
・俺一人ならなんとかなるって局面もありえるだろ？」

「そうね。．．．．．そういうケースもあり得るわね。」
「状況ははっきりしないが、出来る限りの事はやっておくべきだと思う。」

陽子は少し思案してから口を開いた。

「分かったわ。次の分かれ道で分れましょう。」

「ああ。そうしてくれると助かる。落ち合う場所は分かってるな。」

「ええ。A-3ね。」

「ああ。西城も無事ならきつとそこに来る。」
次の分かれ道で二人は分れた。

陽子は下りの道を、リユーヤは登りの道を行った。陽子が助かる可能性を増やす為に、リユーヤはあえて登り道を行った。もちろんリユーヤも一時下山する予定だ。切り立った崖でも無ければ山伝いになんとか降りれる程度の能力はある。

暫く道を行ったらバックトラップ（草食獣などが先まで歩いたフリをして、別の道に入る技法）をかけ、下山するつもりだ。

リユーヤは分れてから少し走り、少し戻ってから道無き山を滑り降りるように降りていった。

下から別部隊がいなければ降りれるが．．．．

リユーヤは山の途中で下を確認した。予想に反して多くの人の気配があった。これでは陽子も捕まっているだろう。

人数の少なそうな所を突破するしかないな。

リユーヤは出来るだけ木々を揺らさないように山を移動し、人数の少ない所を探した。

ここならいける。

リユーヤがそう判断して降りようとした瞬間、上から追いかけて来ている部隊の一人と目が合った。

その男はリユーヤを確認し、トランシーバーを取り出して誰かに連絡を入れた。恐らくリユーヤを包囲するつもりなのだ。

最悪だ……

リユーヤは一拳に山を駆け下りて突破するしかないと考えた。

第32話「A・3」（前書き）

捕まろうとしていたリューヤは、突然、時間を超えあるアパートの前に一体リューヤの身に何が起こったのか？

第32話「A-3」

リユーヤはアパートの部屋の前に立っていた。部屋の番号はA-3、不測の事態が起きた時に集まる予定だった場所だった。

何が起こったんだ？

確か、俺は

山の斜面を降りようとして捕まるところだった。
なんでこの場所にいる？

リユーヤは時計を見た。日付と時間が、記憶にあるものと違う。
既に斜面を降りようとした時から一週間が過ぎている。

記憶が無い……

薬品で記憶を操作されたか？

リユーヤは素早く自分の体を調べたが、捕まった形跡も薬品を使われた形跡もなかった。

おかしい……

この一週間何があった？

リユーヤは暫く思索して、A-3の部屋の扉を開ける事にした。
鍵があるか不安だったが、ポケットをまさぐると、所定の場所に鍵はあった。

リユーヤは身構えた状態で、素早く玄関の扉を開け、中に体を忍び込ませた。誰もいる気配は無い。

西城の姿も陽子の姿も見当たらなかった。だが、数日前に誰か

がいた気配は確かにあった。

リユーヤは暫く、人のいない部屋の中で慎重に敵がいなかを調べた。部屋の中央にあるテーブルの白い紙片に目が行ったが、部屋を調べるのが先だった。リユーヤは一通り部屋を調べると黒いテーブルの上の紙片を手にとった。

それは綺麗な白い封筒だった。

「龍也へ」

手紙の上に大きくそう書かれていた。自分の名前だと思い出すのに2秒ほど時間がかかった。漢字で書かれた名前で手紙を残されるのは初めての事で、一瞬何の事か判断がつかなかった。

よく見れば、それは西城の字であり、自分の名前だった。

そして、この手紙があるという事は打ち合わせ以降、西城も一度はここに来たのだという事。

リユーヤは奇妙な違和感を覚えながら、ゆっくりと手紙の封を切った。

第33話「短い手紙」(前書き)

いきなり、待ち合わせのアパートの前に出たりユーヤに、西城からの手紙が待ち受けていた。記憶を失った一週間に何があったのか？

第33話「短い手紙」

リユーヤは西城からの手紙の封を切り、中の便箋を取り出し開いた。

龍也へ

お前が帰って来るのはまだ先のようなだから、この手紙を残して置く。お前が何を知り、何を覚えているかは不明なので結論だけ書いておく。

陽子と俺は無事だ。そして任務も無事果たせたはずだ。後はお前さんが紫炎に会う事でまるく収まる。

俺と陽子が何故お前を待っていないか疑問に思うかもしれないが、我々の任務は既に完成している事を俺達は知ったんだ。そして、我々はお前にとって足手纏いにしかならない事も知った。

だから我々はお前の元を去る。これはアレクシーナ様も承諾された事だ。お前とアレクシーナ様の武運を祈ってる。

西城 真治

文面はこれだけだった。任務を果たしたという事は、伝説の宝珠とやらは西城か陽子が見つけた紫炎に渡したのだろうか？それとも記憶に無い間にそんな事を自分がしたのだろうか？

何かがおかしい。西城や陽子が無事に逃げられたとしても、俺自身は絶体絶命の危機だったはずだ。あの局面から逃げ延びるのは不可能に近い。いや、それ以前にあれ程大規模な包囲網があったのだから、西城や陽子も逃げる事はほぼ不可能だ。だが現実には、あの状況で三人とも無事帰還出来たという事だ。しかも任務を果たし・・・

あり得ない話だった。

どうやって・・・何があった？リユーヤは手紙を読み返した。そして、読み返し始めてすぐ、

「お前が帰って来るのはまだ先のようにだ」という文面に目が留まった。

この言葉を信じるならば、俺はどこかに行っていたという事になる。その上、西城はその事を知っていた。リユーヤは、何があったのか必死で思い出そうとした。

だが、リユーヤの現実感、あの山の中から突然「A-3」の部屋の前に現れたという実感しかない。

記憶喪失にせよ何にせよ。こんな事があるのだろうか？リユーヤは今日の前に突きつけられた現実に対応しきれなかった。

リユーヤは暫く思索して、アレクシーナに連絡する事を思い出した。記憶が失われているだけならば、定時連絡を行っているはずだ。ならば、アレクシーナは何か知っている可能性が高い。

リユーヤはそう思って、部屋の電話を手にとった。

第34話「電話」(前書き)

記憶を喪失したリユーヤ。残された手紙。謎が謎を呼ぶ第34話

第34話「電話」

リユーヤは電話の受話器を上げて、アレクシーナへ電話をしようと思ったが、一瞬考えて受話器を戻した。

盗聴盗撮があるか調べるのを忘れていた。

リユーヤは押入れの奥にあるクリーム色の探知機を取り出して、それが正常に働いているかどうかを確かめてから、部屋を調べた。取り合えず部屋内は安全のようだった。

リユーヤは盗聴器捜索用の電波探知機をしまい、玄関に鍵をかけてから受話器をとった。

定時連絡ではないが、リユーヤ達が不測の事態に陥った時の為に取りあえずの連絡はつくようになっていた。アレクシーナが出てくる可能性も低くはないはずだ。

番号を押し、電話のコール音が鳴り響く。

コール音三度程で、取次ぎの電話管理人が出た。

「リユーヤ・アルデベータだが、アレクシーナ様にお取次ぎ願えるか？」

「認証コードをお願いします。」

リユーヤは八桁の自分のナンバーを言った。

「80374527」

「リユーヤ様ですね、少々お待ちください。」

ベートーベンの第九が待ち受けで流れる。暫くしてから電話管理人が再び電話に出た。

「アレクシーナ様がすぐに取り次ぐようにとの事ですので、御繋ぎします。」

再びコール音が流れたが、それはすぐに途絶えた。

「もしもし、アレクシーナだが。」

「リユーヤです。」

「何かあったのか？西城からは後はリユーヤが紫炎に逢うだけだと

聞いていたが・・・」

「そうらしいのですが・・・」

「言葉が不明瞭だな。」

「ここ数日にどんな連絡をしたか教えていただけませんか？」

「・・・」

「信じられないかもしれませんが、この一週間の記憶が私から抜け落ちていきます。出来れば何があつたか教えて頂きたいのですが。」

「西城からは順調にいつていると聞いていただけだ。お前が戻るまで少し時間がかかるかもしれないと聞いていたが・・・」

「そこです。私はどこにいつていたのでしょうか？」

「G山だと聞いている。」

「あの山中に？」

「そうらしい。」

「我々は任務を達成出来たのですか？」

「そうだな。後はお前が紫炎に逢うだけだ。」

「紫炎に逢えと？」

「取りあえずはそれしかあるまい。どうしても記憶を取り戻したければ紫炎に相談してみるのも一興だろう。」

「は！」

「最近政務が前にも増して忙しい。時間をあまり取る事が出来ない。」

「申し訳ありません。」

「一段落ついたらじっくり話を聞かせてもらおう。それまでに記憶を戻しておいてもらいたいものだ。」

「は！」

アレクシーナが電話を切る音が聞こえた。手掛かりになる記録はアレクシーナの所にはなかった。いや、正確にはあつたのだが、リユーヤの不安をかき消すような内容ではなかったのだ。アレクシーナの言うとおり、紫炎に逢い、その不思議な力で納得のいく答えを導き出してもらおうと、リユーヤは考えた。

第35話「知らないのは俺だけ」(前書き)

失われた記憶をまさぐるリユーヤ。一体、リユーヤの身に何が起ったのか

第35話「知らないのは俺だけ」

意を決したリューヤは紫炎教に連絡を取り、アポをとった。

いつでも来てくれという話であった為、リューヤはすぐに紫炎のいる森に向かう事にした。

つけられていないか注意し、電車に乗り東京へ向かった。空白の一週間はどう思い出そうとしても思い出せない。必死に思い出そうとしても額から汗が流れるばかりで、なんの進展も無かった。やはり記憶は、G山で包囲されたところで途切れ、次の記憶はA-3の部屋の前だった。

リューヤの心中を不安が駆け巡った。西城もヨーコも敵の手に落ち（本当に敵と言えるかどうかはまだ判明していないが）リューヤ共々何らかの操作を受け、開放されただけではないかという不安が残った。

だが、西城の残した手紙の文面から考えれば、完全に記憶が欠落しているのはリューヤ一人であり、西城もヨーコも（ヨーコに関しては想像に過ぎないが）何らかの結論を持ち帰っている。しかも、西城はリューヤが何かを覚えていない可能性すら示唆している。

リューヤはハツとして自分の携帯電話を手に取った。

アレクシーナより、紫炎より西城に聞けばいいのだ。こんな簡単な事を失念する程リューヤは混乱し慌てていたのだ。

リューヤは新幹線の中にある電話BOXに入り、新幹線内の電話を手に取り西城の携帯電話の番号を押した。

長いコール音が響き、リューヤはヤキモキした。西城は電話に出ないつもりだろうか。そう思わせる程、八度のコール音を長く感じた。

「もしもし？」

「リューヤだけど、西城さんかい？」

「無事帰還したようだな。」

「単刀直入に聞く。この一週間俺に何があった？」

「覚えていないのか？」

「念の為に確認だ。」

「その必要は無いな。お前さんが本物のリユーヤなら依頼者に報告に行く事で任務は達成される。あんたが本物じゃなければ、余計な事は喋れない。そうじゃねーか？電話の相手が本人だと確証を持つる方法は限られてるぜ。」

西城は当然の用心深さをもった。

「新幹線の中の公衆電話じゃ、無理な内容という事か。」

「そういう事だな。」

「依頼者に逢う前に逢えないか？」

「悪いが俺は既に別の任務についてる。ただな・・・」

西城は少し間を置いた。

「お前がリユーヤだとして、俺はお前がどういう状態で帰還するか少しは知ってる。そしてどういう結末を辿るかもだ。」

結末？

「心配はいらんさ。取り合えず依頼者に逢う事だ。そうしなければ始まらない。あの方はお前さんが知りたい事も教えてくれるはずだ。」

「知らないのは俺だけという事か？」

リユーヤは不服そうにそう言った。

第36話「包囲網」(前書き)

紫炎の元を訪れるリユーヤ。リユーヤを見張っていた視線は、監視へと変わっていた。一部へのラストへと繋がる第36話

第36話「包囲網」

紫炎のいる館に近づくにつれて言いよの無い不安は消えていった。だが、それは安心感からではなかった。

G山で出会ったあの連中の気配が、この森を包んでいた。連中は間違いなくいる。しかし、リユーヤがどう誘おうと動く気配は無い。まるで、狙いを付けた山猫が飛び掛る瞬間を待つように、気配はじつとりと静かに付き纏っていた。その緊張感が、中途半端な不安を打ち消し、リユーヤの精神を引締めていた。

捕獲から監視に任務が移行したのだろうか？

リユーヤが単独で行動しているにも係らず、彼らが動きを見せないのは奇妙だと言えた。あのG山での事が嘘のようである。

リユーヤは絡みつくような視線を身に纏いながら、紫炎教団の本部の門の前に立った。

リユーヤが呼び鈴を鳴らす前に、ドアは、ギィツという音を立てて開いた。

門が開くのを泰然と眺めたままのリユーヤの視野に、二人の同じくらいの背格好をした少女が飛び込んで来た。紫炎の侍女の鈴と鋼である。

「ようこそ。」

「龍也様。」

「紫炎様が」

「お待ちです。」

鈴と鋼は代わる代わるにそう言った。

「俺が来る時間も分かってたって事か……」

リユーヤは半分不貞腐れ半分冷徹にそう言った。

「紫炎様は」

鈴が言い、鋼が続ける。

「多くを知るお方」

「不思議な事では」

「ありますまいに。」

リユーヤは物静かな二人を見下ろしながら、少し目を細め、口を開いた。

「紫炎は気づいているのか？」

「ここは籠^{かご}」

「そう伝えろと」

「おっしゃいました。」

鈴と鋼は再び交互に言った。

「ならいいさ、何か対策もあるんだろうさ。さあ、案内してくれ。」

鈴と鋼は振り返りリユーヤを先導した。

どれ程の対策があるにしろ、これだけのプロに囲まれれば脱出も簡単ではあるまい。いや、これだけの人数がこの森に配備されているという事は、紫炎教の制圧までありうるだろう。

リユーヤはその考えを胸に紫炎の元へと向かった。覚悟は決まっていたが蛇の生ごろしのような感覚がつきまとう。

「どこの機関が動いてる？」

西城やアレクシーナなら何か知っていたかも知れない。その事を聞くのを失念した事を、リユーヤは酷く後悔した。

だが、最低でも西城からアレクシーナへ「どこの機関が動いている」という事は伝わっているはずだ。それでなお、リユーヤを単独任務につけたのだから、最悪の結果はないのだろう。

リユーヤは半ばやけくそ気味になり、踏ん切りをつけた。

暫く歩いて、以前と同じ講堂の前に案内された。紫炎は人と遭う時はここと決めているのだろう。

「お入り下さい。」

「紫炎様が」

「お待ちです。」

鈴と綱はそう言って道を開け、リユューヤを進むように促した。

第37話「紫炎の涙」(前書き)

紫えんが明かす事実、驚愕するリユーヤ。失われた記憶のもたらす物は……

第37話「紫炎の涙」

リユーヤが講堂に入ると後ろで扉が閉まった。

奥に蝋燭の光に囲まれた紫炎が見えた。

「俺はあなたの任務をこなしたらいいな。」

リユーヤはそう大声で言っつて、紫炎の側まで大股で歩いていった。木張りの床の上を歩く靴音は講堂内に大きく鳴り響いた。

「そうです。ですがあなたは納得がいつていない。そうですね？」

紫炎は冷静にそう言ったが、リユーヤには取り澄ましているように聞こえた。

「あなたは何もかも知ってるって事か……………」

「いえ、私も多くは知りません、ただ……………」

「ただ？」

「あなたが結局、より難しい選択をしたという事は分かります。」

「より難しい選択？」

「記憶の喪失の事です。」

「あなたは俺に一週間の記憶が無い事も知ってるわけだ。」

「厳密には一週間ではありません。」

「数時間くらいずれてるかもしれないが……………」

「そういう意味ではありません。」

「何を知ってる？」

「言えません。」

紫炎は凜とした目でリユーヤを見詰めた。その瞳はまるでリユーヤを責めるようでもあった。

リユーヤは一瞬紫炎から目を背けたが、紫炎の瞳に負けぬように力を込めて紫炎を見詰めた。

「何故言えない？」

「それは……………」

リユーヤは詰問するかのようにつ紫炎に対し、疑問を投げかけた。

「このままではリーンは高い確率で死ぬと言った。その事に関係があるのか？」

「……………」

「何故答えない！」

リユーヤの口調が激しくなった。

「それを選んだのがあなただからです！」

紫炎は泣き崩れそうな責めるような眼差しでリユーヤを見詰めた。

「選んだ……………」

リユーヤは何を言われているのか分からないという表情で、紫炎をそのまま見続けた。そして、暫くして、今日の前に居るのは超越者としての紫炎ではなく、今にも泣き崩れそうな只の少女だという事を理解した。

「何故、あんたがそんな顔をしなきゃならない。俺の知らない間に何が起こつて、これから何が起こるんだ！」

「……………何故、あなたが自分の記憶を封鎖しなければならなかったか私は理解出来るつもりです……………ですが、運命を変えるには運命を知るしかなかった……………例えばそれがどれ程熾烈な運命だとしても……………」

紫炎という名の少女はボロボロと泣き始めた。

「待ってくれ！俺は運命を知ったと言うのか？そして自分の記憶を自分で封鎖したって言うのか？そしてそれはあんたが泣かなきゃならない程の事で、リーンの運命に関わる事だと、そう言うのか？」

紫炎は涙を浮かべたまま、小さく頷いた。

リユーヤの頭は混乱した。あの状況を切り抜けただけでも奇跡的だ。そして、無事任務を果たしたという事はなおの事絵空事にしか聞こえない。その上、リユーヤは運命を知り、その上で自ら記憶に封鎖をかけた。

この一週間に何が起こり、何を知り、何が出来たのかまるで理解できなかつた。

「リーンは、」

リユーヤは、呟くように小さくそう言いかけ、意を決して紫炎に問った。

「リーンは助かるのか？」

紫炎はゆっくりと横に首を振る。

「~~~~~!!!!!!」

「もしあなたが運命を受け入れた上でなお立ち向かう決心が出来ていたならば、あなたはここには来ていないのです。」

「.....手遅れという事か.....?」

紫炎はコクリと頷いた。その瞬間、リユーヤには目の前の風景が闇に沈んでいくように見えた。

第38話「可能性」(前書き)

かつての恋人、リン・サンドライトの死を予告されるリユーヤ・
・・・僅かな可能性を探る・・・リユーヤとリンの前に待つ結
末はいかに・・第一章ラストパート開始の第38話

第38話「可能性」

「本当に可能性は無いのか？」

リユーヤは辛うじてそう聞いた。リユーヤの記憶喪失の事を知っていた事、洩れるはずの無いアレクシーナの秘密が漏れた事、リユーヤの来る時間まで分かっていた事を考えれば、紫炎の能力を軽んじる事は出来なかった。

「あなたなら可能なはずでした。」

紫炎は静かにそう言った。

「私の所へやってきたこの数時間が致命傷なのです。」

「西城もアレクシーナ王女もあなたに会えと言っていた……そしてあなたもそれを受け入れたはずだ。」

リユーヤはあらゆる事に納得がいかなかった。

「あなたが、記憶を失っている以上他に手が無いのです。それを西城氏もアレクシーナ王女も知っていたからです。」

「だが、手紙が……」

「それも、あなたが記憶を喪失していなければ読まずに済んでいるのですよ。もしあなたが記憶を持ったまま、なお運命に立ち向かう気だったならば、あなたは今頃私の元ではなくリーン・サンドライトの元にいたのですから……」

紫炎の声は相変わらず責めるようだった。

「どうすればいい……リーンがまだ死んでいないならばまだ手は打てるはずだ。まさか……」

紫炎は言葉を遮った。リユーヤが口にするにはあまりに凶々しい言葉だった。

「いえ、リーン・サンドライトはまだ生きています。ですが、もはやあなたの知っているリーン・サンドライトではありません。」

「例の現象の事か？」

リユーヤは内部事情を漏らさぬ範囲でそう聞いた。

「そうです……リーン・サンドライトはあの存在と完全に融合してしまった。あなたにとっては最悪の結果でしょう。」

リューヤの心に言い知れぬ不安と後悔が渦巻いた。

「リーンを救う方法はあるのか？」

「救う方法はありません……ですがそれは決してあなたが報われない結末です。しかし、あなたなら別の方法でリーン・サンドライトを救えるかもしれません。僅かな可能性ですが……賭けてみますか？」

「1%でも可能性があるならやるさ。」

リューヤは目の前の少女に全てを賭ける以外なかった。

「今から言う事は、あなたが否定し自らの記憶を封鎖しなければならなかった程の未来です。聞く覚悟がありますか？」

紫炎のその問いにリューヤは力強く頷いた。リーンを救う為ならなんでもやるつもりだった。例え悪魔に魂を売ろうとも……

そう思うリューヤに紫炎は信じられない言葉を発した。

「あなたが記憶を封鎖したのは、リーン・サンドライトの命を終らせるのがあなた自身だという事を知ったからです。」

第39話「破壊の跡」(前書き)

衝撃の未来を聞いたリユウヤ・・・その裏で既に別の思惑が動いていた。リン・サンドライトの身に何があったのか・・・

第39話「破壊の跡」

リッター・フォーンフィールドはアルテイル公国へ、特別任務で赴いていた。

リッターは目の前に広がる惨状を見て、これがとてつもない何事かの前触れのように思えた。

白い瓦礫の山の中をリッターは注意深く観察しながら歩く。

（酷いものね・・・これがたった一人の能力者のものだといふの？）

リッターはそう思いながら、瓦礫の中の地下への入り口を探った。ここはかつてのイレザ病院・・・リン・サンドライトが保護されていた病院だった。しかし、今は見る影もない。そこはもはや廃墟とも呼べぬ瓦礫の山で、死者30人、重軽傷者143人を出した大惨事の跡だった。

リッター・フォーンフィールド少佐に課せられた任務は、リン・サンドライトの搜索と保護だった。だが、リッターはこの惨状を見て、正直それは不可能だと考えた。これを行ったのがリン・サンドライト一人だと言うならば、搜索はともかく保護は難しい。抵抗すれば射殺する事すら許可されているが、銃がまともに通用するかは疑問だった。破壊の惨状から考えれば、リンの保護の為には最低一個小隊が必要だろう。

だが、今のリッターには、一個小隊を動かす権限は与えられていない。この任務は隠密の任務であり、この事態は秘密裏に処理されるべき事だった。

瓦礫を取り除きながら、現場検証が進む。現場にはリッターが率いるメンバー以外に、別のメンバーがいた。計画 計画に積極的な王直属の親衛隊員達である。

彼らの目的もリン・サンドライトの搜索及び保護であったが、リッター達とは若干内容が違っていた。リッターの任務の重点が保

護にあるのに対し、彼らの任務は「秘密裏」が何よりも優先された。故に、彼らに先に発見されれば、リーン・サンドライとは高い確率で死ぬだろう。アレクシーナを除く王家にとつて、リーン・サンドライトは 能力実験の失敗例であり、処分されるべき物であるからだ。

リッターにリーンとの直接的な面識は無い。だが、リユーヤ・アルデベータと同じ施設にいた事は知っていた。リーンがリユーヤの恋人であった事までは知らなかったが、同じ施設で育ったリユーヤの気持ちを考え、生かして捕まえたいと考えていた。もちろん任務が優先される事は言うまでもないことだったが、リユーヤを実の弟のように考えていたリッターはリユーヤの気持ちを出来るだけ踏みにじらないようにしたいと考えていた。

「リッター少佐。王直属王国親衛隊が地下への通路を発見しました。」

「そう、私もそこに行くわ。」

リッターは青い透き透った目で王直属王国親衛隊の方を見、そちらに向かつていった。

「とてつもない破壊の跡ですね。」

リッターは指揮を取るレスゴ・ウィーア少佐に言った。

「その通りだな。この破壊がたった一人の武器も持たない女の仕業とはとても思えんよ。」

「同感です。」

レスゴ・ウィーア少佐はタバコを銜え火をつけた。

「こここの破壊の跡から、リーン・サンドライトの行き先について得れる物があると思うかね？」

「恐らく何も得れないでしょう。」

「では、ここで調査を続けても無駄骨という事だな。」

「リーン・サンドライトの部屋は特別な監視がされていたようですから、その記録があれば、あるいは手掛かりが掴めるかもしれませんね。」

「君の狙いもそこか……だが、一つの事件に二つの部隊が別々に調査するというのは非効率だ。君達は帰ってアレクシーナ第三王女をお守りしておけばいい。」

レスゴ・ウィーアはそう言った。階級は同じでも王直属とアレクシーナ直属では明らかかな差が意識されていた。レスゴはそれを言外に露骨に表したのだ。

その高圧的な態度にリッターは軽く微笑み、返した。

「リン・サンドライトに関しては、アレクシーナ様に直属の保護権があったと記憶しておりますが……」

「だからこそ問題なのだ。それに既に保護という段階ではなからう。だいたい戸籍的には既に死亡した人間だ。王家としてはあくまで「秘密裏」に処理したいのだよ。」

「リン・サンドライトを殺すという事ですか？」

「既に死んでいる人間に殺すも何もないだろう。」

一段高い所に立ったような目で見るレスゴを、リッターは強い目で見返した。

「我々は、あくまでアレクシーナ様の命令を遂行します。」

「勝手にするがいい。だが、我々の邪魔にならないようにな。」

リッターはレスゴに言いようのない不快感を感じた。

第40話「リン・サンドライト」(前書き)

リン・サンドライト、リユウヤ、アレクシーナ、三人の対峙が、最後の時を呼ぶ……クライマックスまで、後数話……

第40話「リーン・サンドライト」

「これ以上、ヤツを近づけるな！全軍であたれ！」

アレクシーナは力の限り叫んだ。その声に反応し、ウオオオ！という掛け声と共に兵士達が、一人の女に向かって突進する。

だが、その突進は兵士達が撃った銃弾同様、途中で見えない壁に阻まれ、押せども押せども、女に到達する事はなかった。

女は兵士や銃弾の雨を物ともせず前に進んだ。見えない壁に弾かれた兵士達はアレクシーナまでの道を作るように、二手に割れた。

「何を恐れておいでか？アレクシーナ・クライ第三王女……いや、あなたより上または同位の継承権を持つものが全て死んだ今となっては、アレクシーナ女王と呼んだ方がよろしいか？」

「リーン・サンドライトよ、お前が我が王家を恨む気持ちは分かっていなくてもいい。しかし、今、お前がやっている事は謀反に他ならない。それは分かっているのか？」

リーンは「くくく」と笑い、鋭い邪悪な目でアレクシーナを見詰めた。

「あなたの口から謀反などという言葉が出るとは思わなかった。これはあなたが望んだ事でもあるのですよ？」

リーンは邪悪を湛えたままの目で、そう言った。

「お前はリーン・サンドライトではないな……」

「いえ、リーン・サンドライトですよ。ただし、多くの知識を得、多くの力を得て人間を超越したかもしれません。」

「あれと……同化したのか？」

アレクシーナは少し怯えの混じった口調でそう尋ねた。

「私は自由を得る代わりに、「彼」に体を貸したのです。それによって生まれたのが、今の私……」

「自分の魂を売り渡したか。」

アレクシーナは、毅然とした態度を取り戻し、リーンを見詰めた。

「そうかもしれない……でも、私は今とても気分がいい……
きつと何もかもうまくいくんだわ……」

「そうかな？お前がいくら絶大な力を持つとも、人間である事には変わりない。四六時中暗殺者に狙われてうまく生き延びれると思うか？」

「ふふ……そんな単純な問題ではないのよ？クイーン・アレクシーナ」

「何が望みだ？」

「やっと本題に入ってくれたわね……元々私にはあなたを殺す気はなかったの。あなたは、王家で唯一私にまともに接してくれた人間だったから……」

「それは有難いことだな。だが、いささかやり口が過激すぎる。」

「本題に入るわ……、両研究所の撤廃、そしてリユーヤ・アルデベータの自由を保障してもらえるかしら？」

「断れば？」

「あなたは断れない……今の私は核よりも危険な存在。そして銃口は今あなたに向いているわ。」

「……」

「計算づくという訳か……」

リーンが入って来た入り口にリユーヤが立っていた。

「どうやら間に合ったみたいだな。」

「いえ、手遅れよ。」

リユーヤの言葉にリーンがそう返した。リユーヤの見たリーンの瞳は昔から知っていたあの優しい瞳ではなかった。

「リーン。もうやめてくれ。君は人を傷つけるのが嫌いな娘だったはずだ。」

「もう……遅いの……」

リーンの瞳が少し揺らいだ。

「アレクシーナ様には俺が交渉する。君がどこかで生きれるように……」

「リユーヤ……もう私に構わないで……あなたは結局間に合わなかったの……」

「人生をやり直すのに遅すぎるって事はないさ。」

「そうだ、私が女王になれば、融通してやれる事は幾らでもある。王家の腐敗は行き過ぎるところまでいっていた。お前が殺さねば、私が殺していたような連中なのだ……それを犠牲者のお前に罪を被せるような真似はしない。」

アレクシーナはそう声をあげた。

「違うの……」

「違わない、意思をはっきり持つてくれ。俺の全てをかけて、俺は君を救う。それを信じてくれ。」

リーンは涙を浮かべ首を横に振った。

「私は……私じゃなくなるの。もう、今だって前の私じゃない。私は自分の自由の為に「悪魔」に魂を売ったの。あなたに愛される資格はないの。」

「それでも君は……俺に自由を与えようとしてくれた。愛される資格なんて誰にも決められない！俺を……俺を信じてくれ！」

「もう間に合わないの。私は、私はどんどん私じゃなくなっていつてる。こうやってあなたと普通に喋ってるだけでも奇跡なの。もう、あなたと喋ってる私すら私だという認識が持てない。ううん。他の意識が私の中に入り込んでくる……」

「俺は……俺はあくまで君を救いたいんだ。」

「……」

「頭の中で、「人間め」「人間め」ってずっと流れてる。もう無理なの、あなたに私を殺して欲しい。一時でもあなたを愛していられた記憶と気持ちがあるうちに。あ、あああああああ」

リーン・サンドライトは急激に苦しみ出した。

第41話「我々」(前書き)

リーンの内部に巣くうもの、それは神か悪魔か？
果たしてリユージャは、リーンの死の運命を変えられるのか？

第41話「我々」

「リーン！」

リユーヤは苦しみだしたリーンに駆け寄る。

「今だ！取り押さえる！」

アレクシーナが声をあげた。リユーヤがキツとアレクシーナの方を見る。護衛たちは一斉にリーン・サンドライトに飛び掛った。その流れの中でリユーヤもみくちやにされた。

多くの兵士達が折り重なりリーン・サンドライトは完全に取り押さえられたかに見えた。アレクシーナが溜息をホツと吐き出した瞬間、折り重なっていた全ての兵士が吹き飛ばされた。ある者は壁に叩きつけられ、ある者は天井近くまで跳ね上げられた。

倒れていたリーン・サンドライトがゆっくりと立ち上がる。その体から青白い光が発されていた。それはリユーヤのような特殊な能力を持つ者でなくとも見えるほどの光だった。

「愚か者どもめが！」

リーン・サンドライトの口からこの世の物とは思えぬ地獄から響くような声が響いた。

アレクシーナが護身用の黄金銃を素早く抜き、撃った。

だが、弾丸は途中で止まる。

「無駄な真似は止めるんだな。クイーン・アレクシーナ。」

リーン・サンドライトは底冷えのするような目でアレクシーナを見詰め、弾丸をアレクシーナの玉座の側に弾き返した。

「ようやく出てきたか……」

アレクシーナは不敵に笑みを浮かべ言った。

「俺を待っていたという訳か」

リーンの口からそう声が漏れた。

「いや、そういう訳ではないがな。お前達の事には興味がある。一体何の為に我々に未来を教え、何の為にこつちも破壊を行うのか……」

・お前達は我々の想像もつかぬ所で繋がっているのか、お前達の中にも階級や国といった概念があるのか……我々に伝わる伝承のどこまでが本当なのか？興味は尽きんさ。」

「ククク。クイーンアレクシーナ、お前は他の人間どもとは少しは違うようだな。普通このような事態が起きれば人間共は恐れ倒そうとする。自らの分もわきまえずにな。」

「強がった事を言う。お前らがいかに巨大であろうと、「人」を通さねば大きな力を発揮できぬのは調査済みだ。お前のヨリシロであるリーン・サンドライトの肉体を止めてしまえばお前らと言えど大きな力は発揮できない。」

「ククク、ハハハハ。たいしたものだ。しかし、これだけの力を持つてしまった俺をどうやって止める？核兵器でも使わねば俺は止められんぞ。」

「それはどうかな？切り札はまだ私の手の中にある。リユーヤ・アルデベータという 能力者がな。」

リーンがリユーヤの方を向いた。他の全ての人間が弾き飛ばされたというのにリユーヤだけは、弾き飛ばされていなかった。リユーヤはアレクシーナの声を聞いてゆっくりと立ち上がる。

「我々にも弱点がある。自分がこれからどうなるかという未来だけは、読めん。だが、この男が果たしてリーン・サンドライトというこの女の肉体を殺せるかな？」

「大人しく病院の地下に戻るなら今度の件はなんとかしよう。」

「ふはは、もはや病院など跡形も無いわ。」

「予備の施設を用意してある。」

「戻る気があるくらいならば、ここにはいない。」

リーンとアレクシーナの視線がぶつかる。

「リユーヤ！」

アレクシーナはリーンから視線を逸らさぬまま、大声でリユーヤの名を呼んだ。

「こんな事になってすまないと思っている。だが、今リーン・サン

ドライトを野に放てば取り返しのつかない事になる。お前にしか止める事は出来ない。お前の正しい判断を私は信じるぞ。」
アレクシーナは静かにそう言った。

第42話「リーンの思い」(前書き)

運命を変えようと足掻いていたのはリユージャー人ではなかった。迫る時の中で交錯する思い……

第42話「リーンの思い」

リユーヤはゆっくりとした動作でリーン・サンドライトを見詰めた。

「果たして、お前に出来るかな？」

リーンの姿をとった「敵」はそう言った。

「アレクシーナ王女。」

リユーヤはリーン・サンドライトを見詰めたまま静かにアレクシーナに声を掛けた。

「もし俺がリーンを救えたなら、全ての罪は俺に。」

リユーヤの声は心なし小さかった。

「何をする気だ！」

アレクシーナはリユーヤの異常な状態に気付いた。

「この女を救うだと？」

「敵」はそう言った。

「お前にこの体をくれてやる。だからリーンを開放してくれ。」

「なんだと！」

リユーヤの言葉にアレクシーナは叫び声に似た声をあげた。

「ククク、ハハハ。何を言い出すかと思えばそんな事を」

「敵」は高笑いしたが、目は笑っていないかった。

「お前にとっても弱ったリーンの体より俺の体の方が、後々利用価値があるはずだ。」

「本気か？」

「よせ！」

「敵」とアレクシーナが交互に叫んだ。

リユーヤの体が白い光に包まれていく。

「俺には出来るはずだ。リーンに取付いたお前を俺に移動させる事が……」

リーン・サンドライトの頬を涙が伝わった。

「リユーヤ……」

「敵」の口からリーン・サンドライトの言葉が漏れた。

牢獄に似た中でリーン・サンドライトが思う事は、リユーヤ・アルデベータの事ばかりだった。会えないはずだったリユーヤは、自らの足で自分の元に現れた。

リユーヤとアレクシーナは自分をきつと救うと言っていた。だが、時間があまり無い事を一番知っているのはリーン自身だった。

日増しに意識は何者かに侵食され、僅かに自分を保っていられる間でさえ「人間め」「殺せ」「死ぬ」などの声が代わる代わる頭の中で流れるようになっていた。

それでも「希望」はあった。薬漬けでボロボロの状態で意識がハッキリしない状態とはいえ、リユーヤの温かい言葉はリーンの心を救ってくれていた。

「もう大丈夫さ。俺がここから助け出してやる。」
不可能に近い事を言葉にしてくれたリユーヤの心が嬉しかった。その言葉を信じて待ち続ける事が出来たはずだった。だが、それにも増して望む事は、リユーヤの幸せだった。何も出来ずにただ衰弱していく自分の代わりに、リユーヤには幸せになつて欲しかった。それを胸にこのまま死んでいく覚悟も出来ていた。あの予知を聞くまでは……………

あの化け物は事もあるうちに「リユーヤの死」をリーンに告げた。それは、リーン・サンドライトの希望を全て打ち砕くものだった。リユーヤがリーン・サンドライトの為に全てを賭けようとしたように、リーンもリユーヤ・アルデベータの為に全てを賭けた。

リーンもまた、リユーヤ同様、告げられた運命にあがらつて全てを賭けていた。例え、それが「悪魔」に魂を売る事になったとしても……………

第43話「アレクシーナの決断」(前書き)

交錯する三者の思い・・・誰が何を行い、何が起こるのか・・・
感動のラストまで後、数話

第43話「アレクシーナの決断」

「リユーヤ！止めて！」

リーン・サンドライトが悲痛な叫びをあげた。それは、あの地獄の底から響くような声ではなく、リーンの肉声だった。

「俺には他に方法は思いつかない。リーン。俺の代わりに……生きてくれ。」

リユーヤは体中から発散される白いオーラの帯をリーンに繋げ、「敵」との間に道を作った。リユーヤ自身にも何故そんな事が出来たのかは分からなかった。だが、リユーヤはそれが「敵」にとつて「道」になる事を確信していたし、「敵」がどうしようもない力でリユーヤに引き寄せられる事も確信していた。

リーンの体から黒いオーラの塊が、道に沿って移動し始めた。リーンはもう一度「止めて！」と叫んで白い帯を振りほどく為に身を擦った。だが、その白い帯を外す事も、千切る事も出来なかった。アレクシーナとリーンが見守る中、ゆっくりと黒いオーラの塊はリユーヤの中に移動していった。

黒い塊が全てリユーヤの中に入った途端、リユーヤは苦しみだした。

「くっくっ、うおおおおおおおおおおお」

リユーヤは頭を抱えて転げまわる。黒い塊の意思とリユーヤの意思が互いにぶつかり合いリユーヤの魂と体を締め上げているのだった。

「リユーヤー！」

リーンがリユーヤに駆け寄ろうとする。

「来るな！」

リユーヤはギリギリの苦痛の中でなんとかそれだけを口にした。

「リユーヤ！お前の志は無駄にはしない。」

そう言うと同時にアレクシーナは、右手に持った銃をリユーヤに

向けた。

「駄目！」

リーンがアレクシーナとリユーヤの間に手を広げて立ちふさがる。「どけ！リーン。今を逃せば「ヤツ」を仕留めるチャンスは永遠にこないかもしれないのだ。」

「アレクシーナ様、頼む。俺を撃つてくれ！」

リユーヤがそこまで言えたのは奇跡的な精神力だった。

「心が……俺の心が無くなる前に……くう、うああ」

アレクシーナとリユーヤの前に立ち塞がったリーンは泣きながら横に首を振った。リーンにとって、リユーヤが死ぬという結末は絶対に許せない事だった。

「リーン。私はお前を殺してでも「ヤツ」を倒す。「ヤツ」にリユーヤの体を手に入れられたら何もかもが終わりになる。そうさせる訳にいかないのだ。そこをどけ！リーン！」

アレクシーナの言葉を受けても、リーンはリユーヤの身を守るように手を広げたまま首を横に振った。

「そうか……」

アレクシーナはそう呟くとリーンに向けて発砲した。

番外挿入詩&第44話(前書き)

全ての思いに終焉が訪れる・・・感動のクライマックスへ

番外挿入詩&第44話

番外挿入詩 書かれたくない 詩の事

何もかもを失った部屋の中へ

彼は訪れた

かつての思い出を胸に

私の心は小さく弾む

白い奇跡が彼ならば

私は黒い災厄

それでも私は望む

彼が

私が

命の限り輝けるように

生きるという事

それが小さな喜びと大きな苦しみの連続だとしても

私達二人が共に生きれるように

それがかなわぬ

望みだとしても

心から

それを望む

第44話「銃声」

「ア……アレクシーナ様……リンが……リンが動かない……」

リユーヤが消え入りそうな声でそう言った。

アレクシーナは唇を噛み、銃を降ろし威厳のある態度をなんとか保ちながら大声を上げた。

「誰か！誰かおらぬか！リンを、リン・サンドライトをただちに病院へ運べ！」

リン・サンドライトに息が無い事は、誰の目にも明らかだった。

第45話「それぞれ」(前書き)

第一章 エピローグ

第45話「それぞれ」

即位式が終わったアレクシーナは自室に戻り、リッター・フォンフイルドの到着を待っていた。自らが血を流す思いで掴み取るはずだった女王の位が、リーン・サンドライトのおかげで転がり込んできた。

その心情は複雑な物だった。例えどれ程憎んでいたにせよ、血を分けた者の死は思いの他重かったし、転がり込んできた地位も思いの他重かった。

だが、アレクシーナはリーンを恨む気にはなれなかった。王家の都合アレクシーナ自らの都合で、彼女を病院の地下に封印していた。長い閉塞空間の中での、希望の無い毎日。それがどれ程辛いかを考えれば、リーンが「悪魔」に魂を売ったとしてもいたしかたなかったろうと思える。

アレクシーナは考える。全てはアレクシーナの望んでいた方向へと転がりだした。だが、リーン・サンドライトとリユーヤ・アルデベータの犠牲はあまりに大きかった。

アレクシーナが窓の外を眺めながら様々な思いに捉われていると、突然ノックの音が聞こえた。

「リッターです。」

「入れ」

アレクシーナはそう言った。

「リッター・フォンフイルド少佐、ただいま帰還しました。」

「長旅の後、嫌な任務を押し付けてしまったな。」

「いえ……」

「それで、リユーヤの具合はどうなのだ？」

「取り敢えず、薬は必要なくなりましたが、食事も碌にしない状態です。」

「リユーヤにはまだやって貰う事があるのだがな……」

アレクシーナは遠くを見詰めるような目で静かに言った。

「彼なら、きつと回復すると思います。時間は掛かるかもしれませんが……」

「分かっている。故郷の日本なら精神の回復もきつと早いだろう。」

「その事ですが、リユーヤを日本にお送りになってよろしかったのですか？」

「日本でなければならんだ。」

「はあ……」

「貴重な能力者を失ったのだ。紫炎との繋がりは大切にせねばなるまい。」

「は！」

「リッター少佐。これから大変だと思うが、宜しく頼む。今日ももう休んでくれ。」

「は！もったいなきお言葉。ありがたく存じます！」

アレクシーナはリッターが出て行くの見送った後、静かに呟いた。

「リーン……お前の意思は無駄にはしない。」

静かな部屋の中でリユーヤが一人座り込んでいた。

「食事が出来ました。」

鈴の声が聞こえた。

「いない」

リユーヤは静かにそう答えた。

「紫炎様も心配しておいでです。少しでも食べないと、お体に障ります。」

鋼が心配そうに言った。

「後で食べるよ。今は一人にしてくれ……」

リユーヤは座り込んだまま障子に映る二つの影にそう言った。

二人が去っていくのを確認して、リユーヤは再び首をうな垂れた。

「リーン……」

リユーヤ・アルデベータは二度と戻らない最愛の人を思い出し、再び涙した。もう、彼女は戻らない。その思いがリユーヤの心に言いようのない寂寥感を与えた。

「リーン」

リユーヤは再びそう呟き、頬を伝わる涙を拭った。それでも次から次へと涙があふれ出た。リユーヤはリーン・サンドライトとの思い出を思い浮かべ、激しく嗚咽し続けた。

仮題「シャングリラ」第1章 了

第45話「それぞれ」（後書き）

運命の最中に翻弄されたりユーヤとリーン、その運命の結末は、リーンの愛の勝利に終わりました。ですが、その代償はあまりに悲痛な結末でした。この後、第2章をUPしますが、それは7月中旬からです。それでは、それまで〜〜（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7299b/>

仮題「シャングリラ」第一章

2010年10月8日16時00分発行